

C2
212
03



禁電



鹽入太輔
栗屋龍藏
公著

對各國
大日本帝國憲法

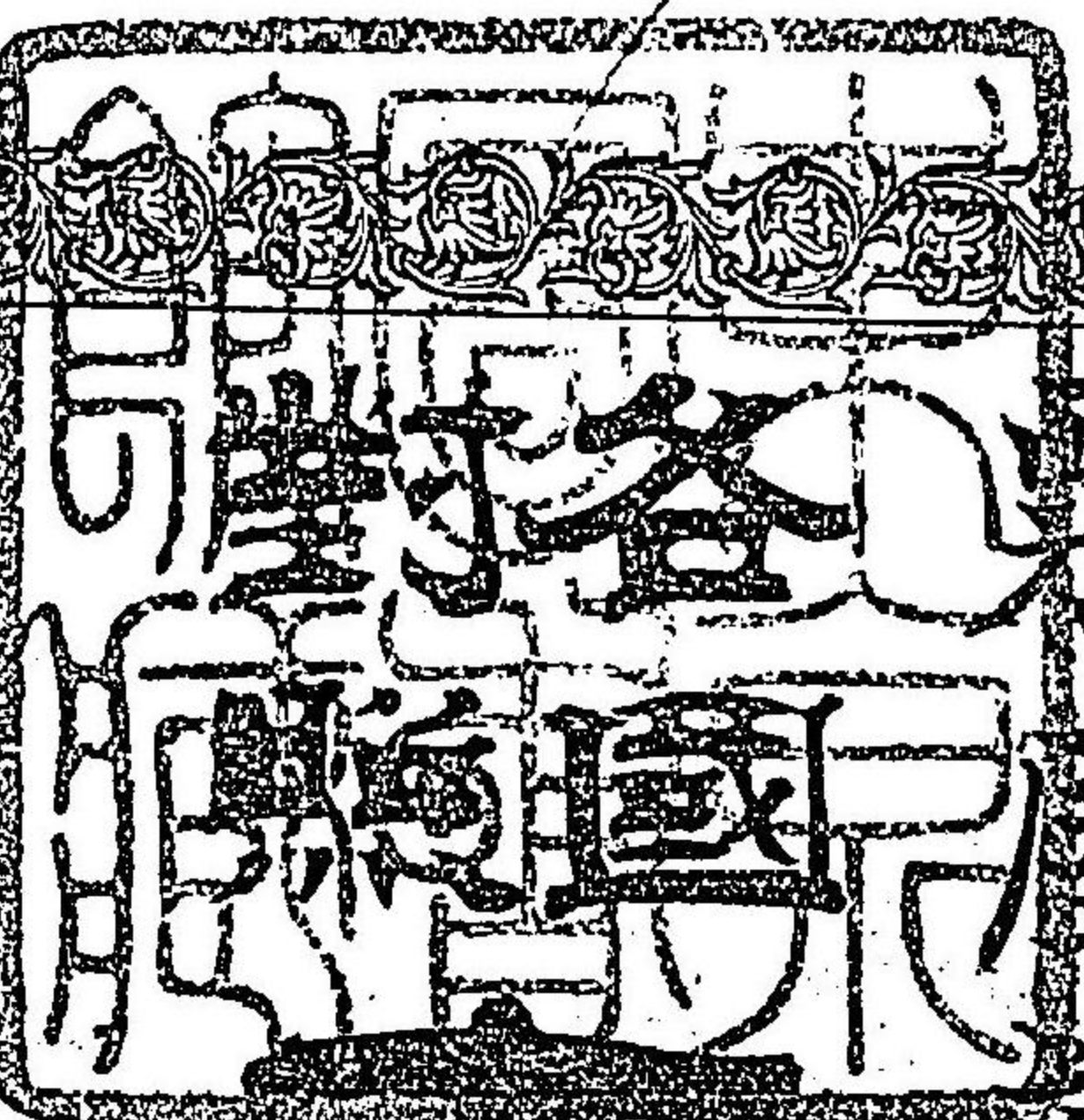
附
英文憲法

東京
博聞社印行



持 15
543

№16341

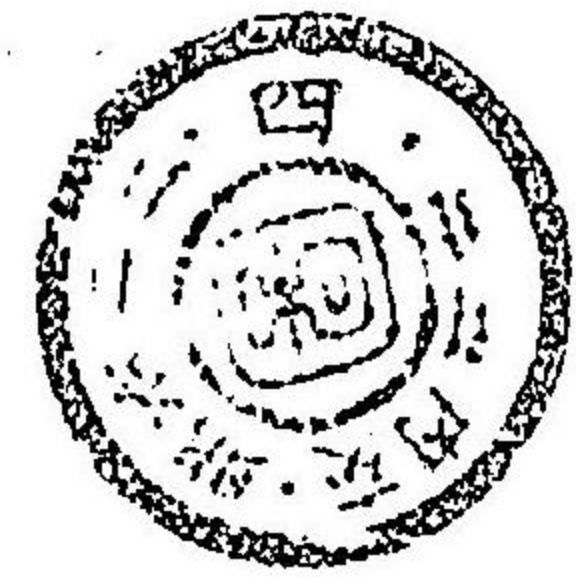
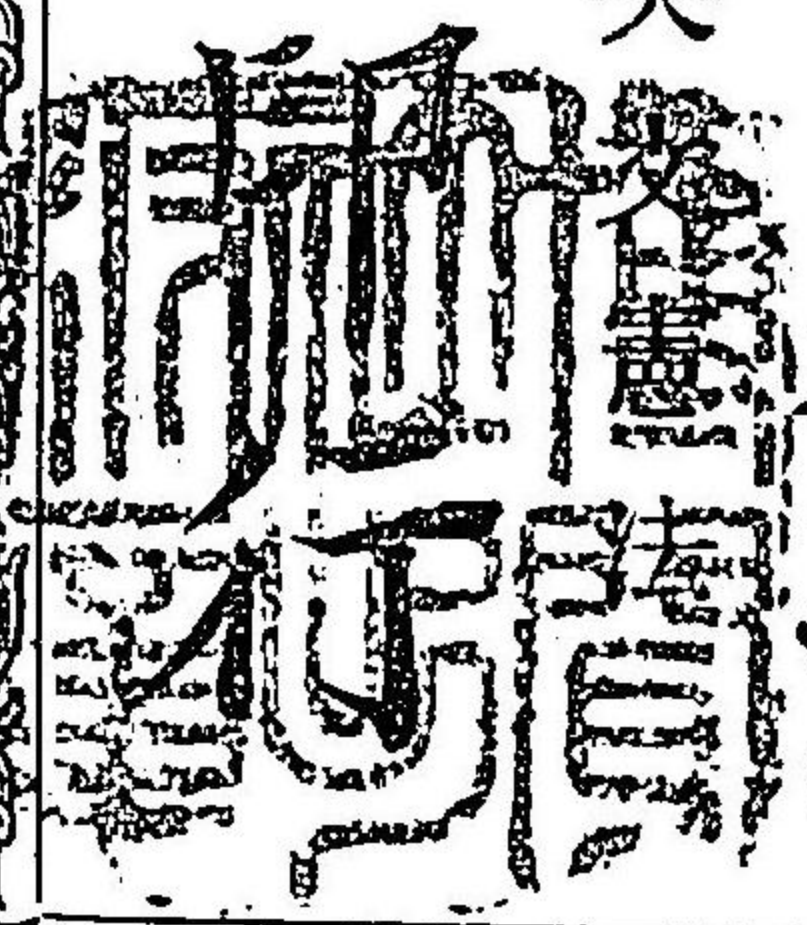


鹽入太輔
栗屋龍藏
全著

大日本帝國憲法

東京博聞社

附英



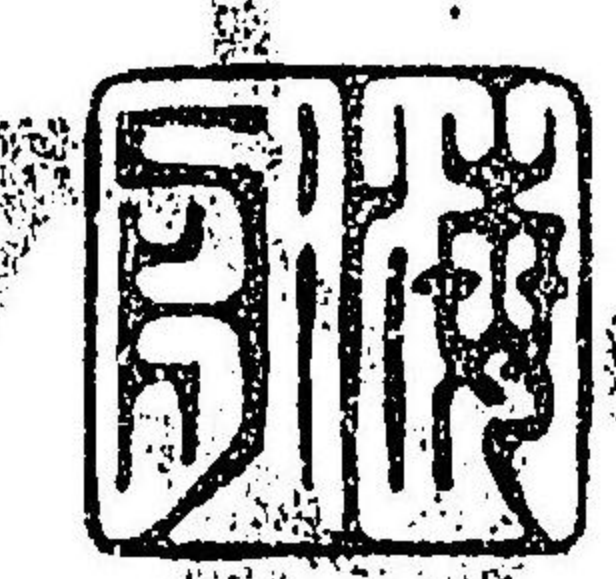
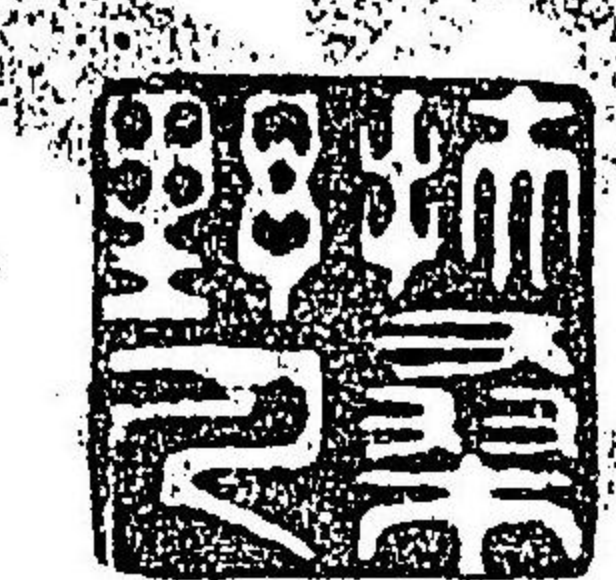
CZ
212
03-2

人
心
善
路
油



明治廿五年正月

少白



序

帝國憲法ノ發布ハ之ヲ小ニシテハ明治年間ノ日本人
民カ二千五百年來未タ嘗テ得サル政權ヲ附與セラレ
タル者ニシテ二千五百餘年ノ古帝國ニ新面目ヲ與ヘ
タルモノナリ之ヲ大ニシテハ獨リ日本ノ品位ヲ上進
セシメタルノミナラス東洋全體ノ品位ヲ上進セシメ
タルモノナリ而シテ彼ノ泰西諸國カ血及ヒ鐵ヲ以テ
始メテ憲法ヲ買ヒ得タル事實ヲ吾人人民カ歡喜ノ間
ニ憲法ヲ得タル事實トヲ比較スル時ハ其幸福雲泥ノ
差アリト云フ可シ然レモ政治ノ美ハ人民ノ如何ニ在

リト云フ如ク吾人ノ幸福ヲ増進シ吾人ノ權利ヲ伸張
スルモノハ憲法ヲ得タルカ爲ニアラス憲法ノ美ナル
カ故ニアラス唯之ヲ運用スル人民ノ伎倆如何ニ在ル
ノミ吾人人民ニシテ能ク憲法ノ與ヘタル政權ヲ活用
シテ國利民福ヲ増進スルヲ得ハ於是乎我帝國ノ眞品
位ヲ上進シ東洋全體ノ眞品位ヲ上進シタルモノト云
フ可シ吾人ノ責任亦重大ナルカナ適マ各國對照大日
本帝國憲法刻成ル著者一言ヲ請フ書シテ之ヲ贈ル

明治二十二年三月廿九日

肥塚

龍識

凡例

一本書ハ專ラ日本帝國ノ憲法ト歐米諸國ノ憲法トヲ對
照シ以テ其異同比較併セテ其精神ノアル所ヲ見ルニ
便利ナルコトヲ勉ム

一憲法ハ其國構成ノ基本ナルヲ以テ自然特有ノ正條ナ
キ能ハス去レハ日本憲法ニ其正條アルモ未タ外國憲
法ニ於テ其比較ス可キ正條ヲ見サルコトアリ本書カ
理由及ヒ註釋等ニ關シテ敢テ勉メサル所以ノモノハ
只日本憲法ノ出所ヲ明カニシ以テ妄說ヲ排却スルニ
アルノミ

一本書ハ其正格ヲ示サンカ爲メニ英文憲法ヲ添ヘテ讀
者ノ參考ニ供セントス

一本書ニ記スル英トハ(英吉利)佛トハ(佛蘭西)合トハ(合衆國)伊トハ(伊太利)白トハ(白耳義)獨トハ(獨逸)普トハ(普魯西)澳トハ(澳地利)ヲ云フ

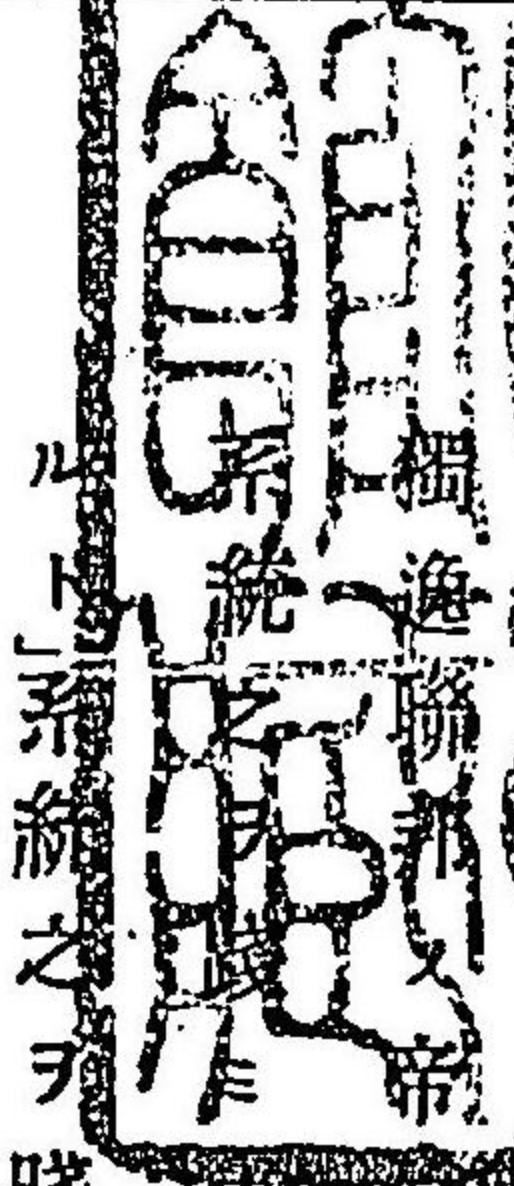
各國大日本帝國憲法目次

○第一章	天皇	<small>(自第一條至第十七條)</small>	一丁
○第二章	臣民權利義務	<small>(自第十八條至第三十二條)</small>	二十九丁
○第三章	帝國議會	<small>(自第三十三條至第五十四條)</small>	四十五丁
○第四章	國務大臣及樞密顧問	<small>(自第五十五條至第五十六條)</small>	七十丁
○第五章	司法	<small>(自第五十七條至第六十一條)</small>	七十二丁
○第六章	會計	<small>(自第六十二條至第七十二條)</small>	八十丁
○第七章	補則	<small>(自第七十三條至第七十六條)</small>	八十九丁

各國大日本帝國憲法

第一章 天皇

第一條 帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス



普魯西ノ王位ハ「ホーヘンツォルレルン」家ノ男統之ヲ踐ミ「白耳義王統」ハ日耳曼ノ「レオポール」侯族之ヲ踐ミ佛蘭西ハ七年交代ノ首長ヲ戴キ合衆國ハ四年交代ノ首長ヲ奉戴セリ萬世一系ノ帝位ヲ踐ムノ皇帝ハ世界萬國中只獨リ日本アルノミ

鹽入太輔
粟屋龍藏 編著

普魯西ノ王位ハ「ホーヘンツォルレルン」家ノ男統之ヲ踐ミ「白耳義王統」ハ日耳曼ノ「レオポール」侯族之ヲ踐ミ佛蘭西ハ七年交代ノ首長ヲ戴キ合衆國ハ四年交代ノ首長ヲ奉戴セリ萬世一系ノ帝位ヲ踐ムノ皇帝ハ世界萬國中只獨リ日本アルノミ

第二條 皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ繼承ス

(伊太利)憲法第二條ニ曰ク伊太利國ハ立憲政體ニ由テ統治ス王位ハ「サリツク」傳ヘサルノ法ヲ以テ男統世襲トス

(普魯西)憲法第五十三條ニ曰ク王位ハ王族法(別ニ王族ニ定メ)ニ循テ長子相續ノ順序ニ依リ次ニ最近傍系親繼承例ニ從ヒ男統世襲トス

(英吉利)權利法典第二條ニ曰ク前條(英國々民ガ「クロムウエル」革命ノ後帝位ニ即キタル「ゼームス」二世ノ失政ヲ擧ケ人民ノ權利ヲ議決シテ「ウイリヤム」王ニ請願シタル箇條ナリ)ニ云フ所ノ權利ヲ確定センカ爲メ貴族僧侶及人民ノ代議士ハ「ウエストミニスター」ノ議院ニ會同シ評決スルヲ左ノ如シ

第三條 天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス

兩皇死後ハ此帝位ヲ皇后分婉ノ子孫ニ傳フヘシ
若シ皇后分婉ノ子孫ナキハ「デンマルク」王ノ妃「アン」及其分婉ノ子孫ニ傳フヘシ
若シ「アン」王妃分婉ノ子孫ナキハ「オレンジ」王分婉ノ子孫ニ傳フヘシ

茲ニ貴族人民「オレンジ」王妃兩殿下ニ此契約ヲ許諾アラントテ請願ス

(白耳義)憲法第六十條ニ曰ク國王ノ定權ハ「レオポール、シヨルジ」、ギレチャン、フレデリツクト、サクス、ゴブールグ陛下ノ直統本生私生ヲ論セス太宗ノ序ニ依リ累代相傳ス而シテ女子及ヒ女子ノ子孫ハ永久位ヲ踐ムヲ得ズ

(伊)第四條ニ曰ク國王ノ身體ハ神聖ニシテ犯スヘカラサル者トス
(澳地利)憲法第四篇第一條ニ曰ク皇帝ハ神聖ニシテ犯スヘカラス
又責任スル所ナシ

(普)第四十三條ニ曰ク國王ノ身體ハ侵スヘカラサル者トス

(英)權利法典第三條ニ曰ク凡ソ從來忠義服從ノ誓詞ヲナスヘキ者
ハ悉ク誓約ヲ爲スヘシ而シテ古例ノ忠義服從ノ誓詞ハ悉ク之ヲ
廢スヘシ而シテ今後爲スヘキ誓詞ハ左ノ如シ

皇帝「ウイリヤム」皇后「メレ」兩陛下ニ對シ何某忠誠無二ノ義務
ヲ盡サンコトヲ誓ヒ之ヲ真正ニ契約ス冀クハ神明ノ我ヲ監保セ
ンコトヲ

世上ニ云フ所ノ羅馬法王ノ權利ヲ以テ帝王ヲ教法上ニ於テ放
逐シ又ハ之ヲ廢立シ又ハ臣屬ヲシテ之ヲ弑セシムル等ノ宗旨

ハ何某之ヲ邪宗異端トシ憎惡厭忌誓テ之ヲ絶ツヘシ

我今誓言ス凡ソ外國帝王又ハ僧侶等ハ此帝國內ニ於テ宗教裁
判ノ權利及ヒ其餘ノ權利威福等ヲ有スルコトアルヘカラス冀ク
ハ神ノ我ヲ監保センコトヲ

(白)第六十三條ニ曰ク國王ノ身ハ侵ス可ラサル者トス而シテ其責
任ニハ國王ノ諸大臣之ニ任ス

第四條 天皇ハ國ノ元首ニシテ統治權ヲ總攬シ此ノ憲 法ノ條規ニ依リ之ヲ行フ

日本皇帝ハ兵政ニ權ノ總攬者タリ吾人ハ此ノ個條ニ就テ敢テ例
ヲ他國ニ求ムルヲ要セス我大日本帝國ノ紛擾騷亂天日爲メニ昏
ク蒼生堵ヲ失シタル中古以來ノ歴史ハ實ニ皇帝カータヒ政權ヲ
藤原氏ニ委ネニタヒ兵權ヲ源平二氏ニ委ネタルカ爲メナラズン

ハアラヌ是ヲ以テ王政ノ古ニ復シ明治維新ノ功業此ニ其基礎ヲ開キタルヤ皇帝ハ自由制度ノ自由ヲ臣民ニ與ヘラレタリト雖兵制ノ二權ニ至リテハ堅ク大綱ヲ總攬シテ敢テ臣下ニ委ネラルハナシ是レ誠ニ吾邦歴史ノ教誡シタル所日本國性ノ許容シタル處ニシテ吾人ハ天皇ノ神聖ヲ認ムルニ次テ必スヤ此ノ大統權ヲ確認セザル可ラス抑モ此ノ統治權ナル語ハ政權ニ在リテハ立法權執行權ノ二者兵權ニ在リテハ陸海軍ノ統帥タル其大綱ヲ掌握シテ憲法條規ノ許ス限リハ斷シテ之ヲ行フノ權アル者トス

(伊)第五條ニ曰ク國王ハ國ノ首長ナリ

(獨)第四篇第十一條ニ曰ク聯邦ノ「プレシヂユム」(盟主)ノ權ハ獨逸皇帝ノ名義ヲ以テ普魯西王ニ在リトス

(澳)第四篇第二條ニ曰ク皇帝ハ責任ノ大臣及ヒ之ニ屬隸スル官吏

ニ依リテ大政權ヲ行フ

(佛)西(佛)第二卷第三條ニ曰ク共和國ノ大統領ハ宰相參議官元老院立法議院ニ依リテ全國ヲ統治ス

第五條 天皇ハ帝國議會ノ協贊ヲ以テ立法權ヲ行フ

(伊)第三條ニ曰ク立法權ハ國王元老院及下院合同シテ是レヲ行フ

(獨)第二篇第五條ニ曰ク帝國ノ立法權ハ上院及ヒ下院共同シテ之ヲ行フ兩院過半數決定ノ諧同ハ帝國ノ法律ノ爲ニ緊要ニシテ之ヲ以テ足レリトス

(澳)第二篇第十三條ニ曰ク何レノ場合ニ在リテモ法律ニ眞確不易ノ力ヲ與フルニハ上下兩院ノ諧同ト皇帝ノ裁可トヲ必要トス

(普)第六十二條ニ曰ク立法權ハ王ト兩院ト共同シテ之レヲ行フ王ト兩院ノ同意ハ新法ヲ發スル毎ニ欠ク可カラサルモノトス

(英)權利法典第一條第一項ニ曰ク國會ノ許可ヲ得ズシテ國法ヲ廢弛シ又ハ之レヲ施行スル等ノ所爲ハ皆違法ナリトス

(白)第二十六條ニ曰ク立法權ハ國王及ヒ代議士院上院ニ於テ共同シテ之レヲ行フ

(合衆國)第一條第一節ニ曰ク(同國憲法中ニ規定シタル)立法ノ權ハ凡テ合衆國元老院及ヒ代議士院ニ歸ス可キモノトス

(佛)第二卷第四條ニ曰ク立法ノ權ハ共和國ノ大統領元老院立法議院相合同シテ之レヲ行フ

第六條 天皇ハ法律ヲ裁可シ其ノ公布及執行ヲ命ス

(獨)第十七條ニ曰ク帝國ノ法律ヲ分付シ及ヒ之レヲ布告シ又ハ其法律施行ヲ監督スルノ權ハ皇帝ニアリトス

(澳)第四篇第十條ニ曰ク法律ノ公布ハ皇帝ノ名ヲ以テス但シ憲法

ニ準シテ設置スル議院之レヲ承認シ責任ノ大臣之レニ副署ス

同第十一條ニ曰ク大政府ハ其權限ヲ守リテ命令ヲ公告シ訓令ヲ下スノ權ヲ有ス及ヒ法ニ循ヒタル條例ト同ク右ノ命令訓令ヲ強テ遵奉セシムルノ權ヲ有ス

(普)第四十五條中ニ曰ク行政權ハ國王一人ニ屬ス

(英)權利法典第一條第四項中ニ曰ク帝權ヲ使用シ政事ヲ施行スルハ專ラ「オレンジ」王ニ屬ス

(白)第六十九條ニ曰ク國王ハ法律ヲ裁可シ及ヒ公布ス

(伊)第七條ニ曰ク國王ハ法律ヲ確定シ及ヒ法律ヲ布告ス

同第五條ニ曰ク行政權ハ國王一人ニ屬ス

(合)第二條第一節ニ曰ク行政權ハ北米合衆國ノ大統領ニ屬ス

(佛)第三卷第十條ニ曰ク大統領ハ法律及ヒ元老院決定書ヲ批准シ

テ是レヲ布告ス

第七條 天皇ハ帝國議會ヲ召集シ其ノ開會閉會停會及衆議院ノ解散ヲ命ス

(伊)第九條ニ曰ク國王ハ每歲兩院ヲ招集シ又ハ延期シ及ヒ解散スルコトヲ得

(獨)第十二條ニ曰ク皇帝ハ上院及ヒ下院議會ヲ招集シ或ハ之レヲ開キ之レヲ延シ及ヒ之ヲ閉ツルノ權ヲ有ス

(澳)第二篇第十條ニ曰ク帝國議會ハナル可キ丈ケ每歲各月ニ皇帝是レヲ召集ス

同第十九條ニ曰ク帝國議會ノ延會及ヒ下院ノ解散ヲ決定スルノ權ハ皇帝ニ屬ス

(普)第五十一條ニ曰ク國王ハ兩院ヲ招集スルヲ及ヒ閉會スルヲ

決ス

國王ハ一時ニ兩院ヲ解散シ或ハ其一ヲ解散スルヲ得

此時ハ國王必ス解散ノ日ヨリ六十日ノ内ニ撰舉人ヲ徵集シ而シテ九十日内ニ議會ヲ召集ス可シ

同第五十二條ニ曰ク國王ハ國會ヲ延期スルヲ得

但シ本院ノ承認ナクシテ延期三十日ヲ超ルヲ得ズ

(英)權利法典第四條ニ曰ク貴族僧侶并ニ人民ハ實ニ國會ノ兩局タリ而シテ兩陛下之レヲ以テ直ニ國會ノ會同トナシ以テ將來國教國法自由權利等ヲ維持セラレントヲ望ム

同「ウイリヤム」三世ノ承認シタル憲章中第十三項ニ曰ク人民ノ疾苦ヲ救ヒテ國法ヲ維持シ又ハ之レヲ改正セン爲ニ屢國會ニ會同ス可シ

(白)第七十一條ニ曰ク國王ハ兩院ヲ同時ニ或ハ各別ニ解散スルノ權ヲ有ス解散ノ上書ニハ四十日以内ニ撰舉人ヲ召集スルヲ及ヒ二月以内ニ議員ヲ召集スルヲ載ス可シ

同七十二條ニ曰ク國王ハ兩院ヲ延期スルヲ得然レトモ兩院ノ承認ナクシテ延期一ヶ月ヲ超ヘ及ヒ一會ニ兩院ノ延期ヲナスヲ得ス

(佛)第五卷第四十六條ニ曰ク共和國大統領ハ議員ヲ召集シ又ハ期限ノ有無ヲ問ハズ之レヲ延會セシメ及ヒ之レヲ解散セシム

之レヲ解散セシメタル時ニ共和國大統領ハ六月内ニ更ニ新タナル議員ヲ召集セザル可カラズ

第八條 天皇ハ公共ノ安全ヲ保持シ又ハ其ノ災厄ヲ避クル爲緊急ノ必要ニ由リ帝國議會閉會ノ場合ニ於テ

法律ニ代ルヘキ勅令ヲ發ス

此ノ勅令ハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出スヘシ若議會ニ於テ承諾セザルトキハ政府ハ將來ニ向テ其ノ効力ヲ失フコトヲ公布スヘシ

(澳)第二篇第十四條ニ曰ク帝國議會ノ裁定ス可キ事件ヲ緊急ニ處分セザル可カラザル場合ニ當リ議會ノ開會セザルトキハ全大臣其責ニ任シ勅令ヲ下シテ之レヲ處決スルヲ得然レトモ之レガ爲ニ憲法ヲ廢棄シ國庫ニ永久ノ負擔ヲ生シ及ヒ官有地ヲ賣却スルニ至ルヲ得ス

但シ全大臣該勅令ノ條文ニ手署シ此憲法ノ例規ニ定ムル制限ヲ踰越スルヲナキニ於テハ假リニ法律ノ力ヲ有スルモノトス

右ノ勅令ハ公布シタル後始メテ開キタル帝國議會ノ會議ニ政府

ヨリ是レヲ示スヲ怠リ及ヒ下院議員召集ノ日ヨリ四週間ノ後ニ至リ猶之レヲ同院ニ移サ、ル時又ハ兩院ノ中ニテ之レヲ承知セサル時ハ其法律タルノカヲ失フ全大臣ハ右勅令ノ假リニ有スル法律ノ効力ヲ失フタル日ヨリ即時ニ廢棄ノ責ニ任ス

(普)第六十三條ニ曰ク若シ治安ヲ保スル爲メニ或ハ不意ノ凶災ノ爲ニ緊急ノ處置ヲ爲スヲ要シ而シテ兩院ノ適マ解散シタル時ハ在廷大臣總員ノ責任ヲ以テ下付シタル勅令(國王ノ勅令)ニシテ其憲法ト相反カサルモノハ法律ノ効力ヲ有スルヲ得
但兩院ノ次會ニ於テ其勅令ニ付必ズ兩院ノ同意ヲ得サル可カラズ

第九條 天皇ハ法律ヲ執行スル爲ニ又ハ公共ノ安寧秩序ヲ保持シ及臣民ノ幸福ヲ増進スル爲ニ必要ナル命

令ヲ發シ又ハ發セシム但シ命令ヲ以テ法律ヲ變更スルコトヲ得ス

(伊)第六條中ニ曰ク國王ハ法律ヲ執行スル爲メニ緊要ナル布告又ハ規則ヲ制定スルノ權ヲ有ス然レトモ法律ノ履行ヲ停止シ或ハ法律ヲ遵守セサルヲ許可ス可カラス

(獨)第四篇第十七條中ニ曰ク帝國ノ法律ノ執行ヲ監督スルノ權ハ皇帝ニアリトス凡テ皇帝ノ命令及ヒ規則ハ帝國ノ名義ヲ以テ布告ス而シテ其効力ヲ有スル爲ニ「ライクスカンツレル」ノ花押ヲ必要トス而テ「ライクスカンツレル」之レカ責ニ任ス

(澳)第四篇第十一條ニ曰ク大政府ハ其權限ヲ度リテ命令ヲ布告シ訓條ヲ下スノ權ヲ有ス及ヒ法ニ循ヒタル條例ト同ク右ノ命令訓條ヲ強テ遵守セシムルノ權ヲ有ス

法律ヲ執行スル爲メニ行政官ニ付スル權及ヒ治安ヲ保スル爲メニ常備ニ若クハ臨時ニ徵募スル軍兵ノ使役ハ別法是レヲ定ム
(普)第四十五條中ニ曰ク國王ハ法律ノ分布ヲ命シ而シテ其施行ノ爲メニ要用ナル規則ヲ發ス

(白)第六十七條ニ曰ク國王ハ法律施行ノ爲メニ要用ナル條例及ヒ命令ヲ作ルト雖モ法律ノ施行ヲ停止シ及ヒ曲免スルヲ得ス

(佛)第三卷第六條中ニ曰ク共和國ノ大統領ハ法律ヲ施行スルニ必要ナル規則及ヒ告令ヲ制定ス

第十條 天皇ハ行政各部ノ官制及文武官ノ俸給ヲ定メ及文武官ヲ任免ス但シ此ノ憲法又ハ他ノ法律ニ特別ヲ掲ケタルモノハ各其ノ條項ニ依ル

(伊)第六條ニ曰ク國王ハ諸官員ヲ選任ス

(獨)第十八條ニ曰ク皇帝ハ帝國ノ官吏ヲ命シ及ヒ帝國ノ爲ニ官吏ニ警詞ヲ宣ヘシメ緊要ナル時機ニ於テハ是レヲ免黜スルノ權アリ

(澳)第四篇第三條ニ曰ク皇帝ハ諸大臣ヲ命シ及ヒ之レヲ免ス且ツ法律ニ於テ特ニ命スル所ナケレハ大臣ノ啓告ニ依リ政府各務ノ諸官吏ヲ進退ス

(普)第四十七條ニ曰ク國王ハ軍兵及ヒ其他ノ諸部官ニ於テ凡テノ官吏ヲ命スルノ權ヲ有ス但シ法律ヲ以テ特ニ定メタル者ハ此限ニ非ス

同第四十五條中ニ曰ク國王ハ諸大臣ヲ任免ス

(白)第六十五條ニ曰ク國王ハ諸大臣ヲ任免ス

同第六十六條ニ曰ク國王ハ一切ノ政務官及ヒ外交官ヲ任命ス但

シ法律ヲ以テ定ムル所ノ特例ハ此限ニ非ス

其他ノ諸官吏ハ法律ノ明文ニ據ルニ非サレハ國王ヨリ任命セス

(佛)第三卷第六條中ニ曰ク共和國ノ大統領ハ凡テノ官吏ヲ選任ス

(英)大憲章第五十條ニ曰ク「アゼース」ノセラード(當時ノ權臣)ノ親戚ハ悉

ク之レヲ諸地方廳ヨリ免黜シ彼輩ヲシテ再ヒ英國ノ地方官吏タ

ラシメサル可シ又「シゴネー」ノ「インゼ、ラード」「カンセリ」ノ「カンド

リユー」「ピーター」「シヨン」ヲモ免黜ス可シ又「タシゴネー」ノ「シヨン」「マ

ーテン」ノ「ゼオラレ」兄弟ヒクツプマーク兄弟及其甥タル「ゼオヘ

リ」及ヒ此輩ノ僚屬ヲモ免黜ス可シ

第十一條 天皇ハ陸海軍ヲ統帥ス

(伊)第五條中ニ曰ク皇帝ハ海陸軍ヲ指揮ス

(獨)第九篇第五十三條ニ曰ク帝國海軍ハ皇帝ノ指揮ニ屬スル唯一

ノ海軍タリ皇帝ハ海軍ノ構成ヲ爲シ海軍ノ文官及武官ヲ任命ス

海軍ノ官吏及兵卒ハ皇帝ニ對シ誓詞ヲ宣フヘシ

同第十一篇第六十三條中ニ曰ク獨逸帝國一般ノ陸軍ハ戰爭ト安

寧トヲ問ハス皇帝ノ指揮ニ屬スル唯一ノ陸軍タルヘシ

(澳)第四篇第五條中ニ曰ク皇帝ハ軍兵ノ元帥ナリ

(普)第四十六條ニ曰ク國王ハ軍事ノ長ナリ

(白)第六十八條中ニ曰ク國王ハ海陸軍ヲ指揮ス

(合)第二條第二節ニ曰ク合衆國大統領ハ合衆國海陸軍及合衆國ノ

用ニ供セラレタル各州民兵ノ總督タルヘシ

(佛)第三卷第六條中ニ曰ク共和國ノ大統領ハ國家ノ首長ニシテ陸

海軍ヲ指揮ス

第十二條 天皇ハ陸海軍ノ編制及常備兵額ヲ定ム

第十三條 天皇ハ戰ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ條約ヲ締結ス

(伊)第五條中ニ曰ク國王ハ戰書ヲ投シ和親同盟ノ貿易等ノ條約ヲ結フ然レモ國益及國安ニ關スル條約ハ豫メ兩院ニ報知シ且其理由ヲ附ス可シ
國財ヲ費シ若クハ國疆ノ變改ニ關スル條約ハ兩院ノ承認ヲ得ルニ非ラザレハ其効力ヲ有セス

(獨)第十一條中ニ曰ク國際法ニ關スル事ニ付テハ皇帝帝國ノ名義ヲ以テ戰ヲ宣ヘ和ヲ決シ外國ト同盟シ及其他ノ條約ヲ結ヒ國使ヲ派出シ及外國ノ使節ヲ受ク
帝國ノ名義ヲ以テ戰ヲ宣ルニ於テハ外國ヨリ聯邦ノ領地及其海軍ヲ侵襲スル時機ノ外上院ノ承諾ヲ得ルヲ緊要トス外國ノ條約

ハ此國憲ノ第四條帝國及帝國法律ノ管理ヲ受ク可キ諸件ノ規定ニ掲載シタル帝國立法ニ關スル事件ニ適合シタルニ於テハ其條約ヲ結フ爲メ上院ノ承認ヲ得ルヲ緊要トス又其條約ヲ有効ナラシムルハ下院ノ承認ヲ得ルヲ緊要トス

(澳)第五條中ニ曰ク皇帝ハ戰ヲ宣シ和ヲ約ス

同第六條ニ曰ク皇帝ハ國事ノ條約ヲ結フ

貿易ノ條約及帝國ノ全部若クハ局部ノ責任或ハ國民ノ義務ヲ起ス可キ國事ノ條約ヲ正確ノ者トナス爲メ帝國議會ノ承認ヲ必要トス

(普)第四十八條ニ曰ク國王ハ宣戰講和及外國政府ト諸條約ヲ締結ス

貿易ノ諸條約及一國若クハ國民ノ負擔ヲ起スヘキ諸條約ハ兩院

ノ同意ヲ得テ始メテ施行スヘキ効力アリ

(白)第六十八條中ニ曰ク國王ハ宣戰講和及同盟條約ヲ爲ス

貿易ノ條約及國財ヲ費スヘキ條約若クハ各民ニ關係スヘキ條約ハ兩院ノ承認ヲ得タル後ニ非ラサレハ之ヲ行フヲ得ス

(合)第二條第三節中ニ曰ク合衆國大統領ハ元老院ノ助言ト承諾トニ因リ條約ヲ締結スルノ權ヲ有ス

(佛)第三卷第六條中ニ曰ク共和國ノ大統領ハ宣戰講和同盟通商ノ條約ヲ締結ス

同國一千八百七十五年七月十六日ノ法律ニ曰ク共和國大統領ハ條約ヲ締盟シ及批准ヲナス

和親通商條約及國ノ財務ニ關係アル條約並ニ外國ニ在ル佛蘭西人ノ身分ト其ノ財産所有權トニ關シタル條約ハ兩院ニ於テ議定

シタル後ニアラサレハ確定スルヲ得ス

凡ソ領地ノ讓與交換併合ハ一箇ノ法律ニ依ルニ非ラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第十四條 天皇ハ戒嚴ヲ宣告ス

戒嚴ノ要件及効力ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第十五條 天皇ハ爵位勳章及其他ノ榮典ヲ授與ス

(普)第五十條ニ曰ク國王ハ爵位及其他勳章ヲ與フルノ權ヲ有ス

(白)第六十六條ニ曰ク國王ハ軍士ニ位階ヲ賜フ

同第七十五條ニ曰ク國王ハ貴族ノ爵位ヲ與フルノ權ヲ有ス但シ附スルニ特權ヲ以テスルコトナシ

(澳)第四篇第四條ニ曰ク爵位勳章及其他ノ榮章ハ皇帝之ヲ授與ス

(伊)第七十九條中ニ曰ク國王ハ貴族ノ爵位ヲ授クルノ權ヲ有ス

同第八十條ニ曰ク凡テ國民國王ノ許可ヲ得ルニ非ラサレハ外國ノ勳章及尊稱或ハ養老金ヲ受クルヲ得ス

第十六條 天皇ハ大赦特赦減刑及復權ヲ命ス

(伊)第八條ニ曰ク國王ハ犯罪ヲ赦宥シ及刑ヲ減輕スルノ權ヲ有ス
(普)第四十九條ニ曰ク國王ハ特赦ノ權ヲ有ス

(英)權利法典ニ曰ク凡ソ兩議院ニ於テ罪狀ヲ宣告セラレタル大臣ハ恩赦ノ特典ニ與カルコトヲ得ス

(白)第七十三條ニ曰ク國王ハ裁判官ノ判決シタル刑罪ヲ特赦シ及ヒ輕減スルノ權ヲ有ス但シ諸大臣ニ付キ法律ニ定メタル者ハ此限リニアラス

(澳)第五篇第十三條ニ曰ク皇帝ハ大赦特赦及減刑ノ權ヲ有ス但シ執行官ノ責任ニ對シ法律ニ依テ定メタル特例ハ此限リニアラス

(米)第二條第二節ニ曰ク合衆國大統領ハ彈劾ノ場合ヲ除クノ外合衆國ニ對シタル刑罰ヲ猶豫シ若クハ赦免スルノ權ヲ有ス

第十七條 攝政ヲ置クハ皇室典範ノ定ムル所ニ依ル攝政ハ天皇ノ名ニ於テ大權ヲ行フ

〔参照〕 皇室典範第五章

第十九條 天皇未タ成年ニ達セサルトキハ攝政ヲ置ク天皇久キニ亘ルノ故障ニ由リ大政ヲ親ラスルコト能ハサルトキハ皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ攝政ヲ置ク

第二十條 攝政ハ成年ニ達シタル皇太子又ハ皇太孫之ニ任ス
第二十一條 皇太子皇太孫在ラサルカ又ハ未タ成年ニ達セサルトキハ左ノ順序ニ依リ攝政ニ任ス

第一 親王及王

第二 皇后

第三 皇太后

第四 太皇太后

第五 内親王及女王

第二十二條 皇族男子ノ攝政ニ任スルハ皇位繼承ノ順序ニ從フ其ノ女子ニ於ケルモ亦之ニ準ス

第二十三條 皇族女子ノ攝政ニ任スルハ其ノ配偶アラサル者ニ限ル

第二十四條 最近親ノ皇族未タ成年ニ達セサルカ又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ他ノ皇族攝政ニ任シタルトキハ後來最近親ノ皇族成年ニ達シ又ハ其ノ事故既ニ除クト、雖皇太子及皇太孫ニ對スルノ外其ノ任ヲ讓ルコトナシ

第二十五條 攝政又ハ攝政タルヘキ者精神若ハ身體ノ重患アリ又ハ重大ノ事故アルトキハ皇族會議及樞密顧問ノ議ヲ經テ其ノ順序ヲ換フルコトヲ得

(伊)第十二條ニ曰ク國王未成年ノ間ハ嗣位ノ順序ニ從ヒ最近ナル王族ノ滿二十一歳ナル者攝政ノ職ニ任ス可シ

第十三條ニ曰ク攝政ノ職ニ任スヘキ最近王族ノ未成年ニシテ他ノ王族攝政ノ職ニ任シタル時ハ國王成年ニ至ル迄其攝政ハ繼續シテ其職ニ在ル可シ

第十四條ニ曰ク男統ノ王族ナキ時ハ母公攝政ノ職ニ任ス

第十五條ニ曰ク母公ナキ時ハ諸大臣國王ノ殂シタル十日ノ間ニ兩院ヲ徵集シテ兩院ニ於テ攝政ト爲スヘキ者ヲ選任ス可シ

第十六條ニ曰ク以上掲載スル所ノ攝政職ニ關スル諸種ノ規定ハ

成年ナル國王ノ政ヲ親ラスル能ハサル狀アル時モ亦準據ス可キ者トス

若シ滿十八歳ノ太子アル時ハ之ヲ以テ攝政ノ職ニ任ス可シ

第十七條ニ曰ク國王七歳ニ至ル迄ノ間ハ母公其後見ヲ爲シ七歳ヲ超ユル時ハ別ニ攝政ヲ任ス可シ

(普)第五十七條ニ曰ク國王未成年ニ屬シ若クハ曠時故障アリテ政ヲ親ラスルヲ能ハサル時ハ最近ナル傍系親ノ成年ナル者攝政ス此ノ時ハ其人必ス急速兩院ヲ召集シ兩院會合シテ攝政ヲ設クルノ必要ナルヲ布告セシムヘシ

同第五十七條ニ曰ク若シ成年ノ傍系親ナク且ツ法律ヲ以テ豫定シタル者ナキハ國相(八省ヲ合スルノ名)必ス兩院ヲ召集シ兩院會合シテ一ノ攝政ヲ撰ハシム○攝政職ニ即クニ至ル迄ハ國相大政ニ任ス

同第五十八條ニ曰ク攝政ハ國王ノ名ヲ以テ王權ヲ行フ

(白)第七十九條ニ曰ク國王ノ崩セシ日ヨリ始メテ嗣王若クハ攝政ノ宣誓ニ至ルマテ諸大臣相合シテ一會ヲ爲シ以テ其責任ニ當リ白耳義國民ノ名義ヲ以テ國王ノ權ヲ行フ

第二章 臣民權利義務

第十八條 日本臣民タルノ要件ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

(白)憲法第四條ニ曰ク白耳義人タルノ身分ヲ得且ツ之レヲ保チ及ヒ之レヲ失フコトハ民法ニ由テ定メタル規則ニ從フ

白耳義人タルノ身分ノ外ニ此ノ憲法及ヒ其ノ他ノ公權ニ關スル諸法律并ニ公權ノ受用ノ爲ニ欠ク可カラサル約束ヲ定ム

同第五條ニ曰ク歸化ハ立法權ニ依リ之レヲ許ス外國人ヲシテ白

耳義人ノ公權ヲ受用セシムルヲハ獨リ大歸化ニ止ル

(佛)民法ニ曰ク佛蘭西人トハ佛國ニ生レタル者、大歸化小歸化ノ許可ヲ得タル者、歸化ノ許可ヲ得サルモ三年以上佛國ニ住シテ他ニ轉スルノ意志ナキ者、及ヒ佛蘭西人ニ嫁シタル外國ノ女ヲ云フ

(澳)第一篇第一條ニ曰ク凡ソ帝國議會ノ代表スル諸王國及屬地ノ人民ハ皆澳地利國民ノ權利ヲ有ス

(米)憲法補正第十四節ニ曰ク合衆國ニ生レ若クハ之ニ歸化シタル人民及ヒ其ノ支配ヲ受クル所ノ人民ハ合衆國ノ國民ニシテ且ツ其居住スル州ノ人民ナリ

第十九條 日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應シ均シク文武官ニ任セラレ及ヒ其ノ他ノ公務ニ就クコトヲ得

(伊)憲法第廿四條ニ曰ク凡ソ國民法律ニ定メタル特條ノ外均ク政權ヲ享ケ又ハ文武ノ官ニ任スルヲ得

(澳)憲法第一篇第三條ニ曰ク凡ソ國民ハ皆文武官吏タルヲ得ヘシ

(白)憲法第六條中ニ曰ク白耳義人タル身分アラハ即チ文武官ニ任スルヲ得ヘシ但シ法律ニ特條ヲ定ムル者ハ此限ニアラス

(獨)憲法第三條ニ曰ク獨逸全國内ニ於テ國民タルノ權ハ凡テ平等トス故ニ聯邦一ヶ國ノ人民ハ聯邦ノ他ノ一國ニ於テ該國人ト同一ノ待遇ヲ住居營業官職又ハ土地ヲ購ヒ政權ヲ得ルヲ其他種々民權ニ付該國人ト平等ノ權利ヲ有ス且治罪及ヒ法律ノ保護ヲ受クヘキヲニ於テモ亦該國人ト同一ノ待遇ヲ受ク

(普)憲法第四條ニ曰ク凡ソ普國公民タル者ハ法律上ニ於テ平等ト

ス故ニ國民ノ間ニ特許ナル者アルコトナシ凡ソ國民法律ニ定メタル諸種約束ヲ除クノ外均ク官ニ任スルコトヲ許ス

第二十條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ兵役ノ義務ヲ有ス

(獨)第五十七條ニ獨逸人ハ兵籍ニ入ルノ義務アリ

(普)第三十四條ニ曰ク兵役ハ凡テ普魯西國民ノ義務ナリ

(伊)第七十五條ニ曰ク海陸軍兵士ノ點呼徵募ハ法律ニ依テ之ヲ行フ

同第七十六條ニ曰ク法律ノ定ムル所ニ應シテ邑兵ヲ設ク

第二十一條 日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ納税ノ義務ヲ有ス

(伊)第二十五條ニ曰ク凡ソ國民ハ各々財産ノ比例ニ從ヒ國費ノ爲

メニ租税ヲ納ムル者トス

(普)第一百一條ニ曰ク租税ニ付テハ特許アルコトナシ

第二十二條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ居住及移轉ノ自由ヲ有ス

(澳)第一篇第四條中ニ曰ク凡ソ國民ハ何レノ地方ニ於テモ居住ヲ占ムルコトヲ得

同第七條ニ曰ク兵役ニ服スル義務ノ外遷徙(外國ニ遷徙スルヲ云フ)ノ自由ヲ制限セス

(普)第十條ニ曰ク移住ノ自由ハ兵役ノ故ニアラサルヨリハ政府ヨリ之レヲ制限スルコトヲ得ス

第二十三條 日本臣民ハ法律ニ依ルニ非スシテ逮捕監禁審問處罰ヲ受クルコトナシ

(伊)第二十六條ニ曰ク國民ノ自由ヲ保護ス

法律ニ掲ケタル時機ニ非ス及ヒ法律ニ定メタル規定ニ由ルニ非サレハ何人モ拿捕セラレ、イナク且ツ裁判所ニ招喚セラレ、イナシ

(澳)第八條ニ曰ク人身ノ自由ハ保固トス故ニ千八百六十二年十二月二十七日ノ法律ハ此憲法ノ部内ニ入ル

凡ソ法ニ違テ命令シ又ハ放免ヲ怠リタル拿捕ハ其ノ損害ヲ被リタル者ニ政府ヨリ償金ヲ拂フ可シ

(普)第八條ニ曰ク法律ニ由ラスシテ人ヲ糺治シ又ハ刑罰ヲ科スルイヲ得ス

(白)第九條ニ曰ク何等ノ刑モ法律ニ依ルニ非ラサレハ之レヲ設ケ之レヲ科スルイヲ得ス

(英)大憲章第三十七條ニ曰ク良民ハ同列ノ裁判(内階級ノ良民即チ陪審ヲ用ルノ濫觴)

若クハ其ノ地ノ法律ニ非サレハ決シテ捕縛セラレサル可シ又繫獄セラレサル可シ其ノ領地ヲ沒取セラレサル可シ被保護權褫奪刑ニ處セラレサル可シ追放セラレサル可シ死罪ニ處セラレサル可シ朕モ亦之ヲ認許セサル可シ

(合)憲法補正第十四節中ニ曰ク合衆國々民ハ法律ノ適當ナル手續ヲ履マスシテ人民ノ生命自由及ヒ財産ヲ奪フ可カラズ

第二十四條 日本臣民ハ法律ニ定メタル裁判官ノ裁判ヲ受クルノ權ヲ奪ハル、コトナシ

(白)第八條ニ曰ク何人モ其ノ情願ニアラスシテ法律ノ付與スル所ノ法官ニ接スルイヲ妨ケラル、イナシ

第二十五條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外

其ノ許諾ナクシテ住所ニ侵入セラレ及搜索セラルハ
コトナシ

(伊)第二十七條ニ曰ク住居ハ侵ス可カラサルモノトス法律ニ示シ
タル定規ニ由ラス或ハ法律ニ定メタル方式ニ由ラスシテ住居ヲ
檢探スルヲ得ス

(澳)第一篇第九條ニ曰ク住居ハ侵犯ス可カラス故ニ住居不侵ノ權
利ニ關スル一千八百六十二年十月廿七日ノ法律ハ此憲法ノ部内
ニ入ル

(白)第十條ニ曰ク住居ハ侵ス可カラス法律ニ掲ケタル場合ニ於テ
シ及ヒ法律ニ示ス所ノ規程ニ於テスルニ非サレハ家宅ノ搜索ヲ
行フヲ得ス

第二十六條 日本臣民ハ法律ニ定メタル場合ヲ除ク外

信書ノ祕密ヲ侵サル、コトナシ

(澳)第十條ニ曰ク信書ノ祕密ハ侵ス可カラス凡ソ信書ヲ勾收スル
ハ現在ノ法律ニ依リ法ニ適シタル拿捕又ハ家中探索ノ場合ヲ除
クノ外戰時若クハ法衙ノ斷案ニ據ルニ非サレハ之レヲ行フヲ
得ス

(白)第二十二條ニ曰ク信書ノ祕密ハ侵ス可カラス郵便信書ノ祕密
ヲ破リタル者アレハ其吏人如何ナル責ニ任ス可キカハ法律之レ
ヲ定ム

(普)第三十三條ニ曰ク信書ノ祕密ハ侵ス可カラス
戰時及ヒ罪犯糾治ノ爲メニ止ヲ得サル場合ハ法律ヲ以テ之ヲ定
ム可シ

第二十七條 日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サル、コトナ

公益ノ爲必要ナル處分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル

(伊)第二十九條ニ曰ク凡ソ財産ハ侵ス可カラサルモノトス然レトモ法律ニ掲ケタル公益ノ故ニ由リ法律ニ於テ正當ナル賠償ヲ以テスル時ハ其全部或ハ局部ヲ失フ可シ

(澳)第一篇第五條ニ曰ク私有ハ侵犯ス可カラス法律ノ定ムル場合ニ於テシ及ヒ之ニ掲ケタル規例ヲ踐履スルニアラサレハ私有主ノ意ニ違フテ沒收ヲ行フヲ得ス

(普)第七條ニ曰ク私有財産ハ侵ス可カラサルモノナリ

(白)第十一條ニ曰ク公益ノ故ニ依リ及ヒ法律ニ定メタル方式ニ依リ而シ豫メ正當ナル賠償ヲ以テスルニ非サレハ何人モ私有權ヲ奪ハル、ヲナシ

第二十八條 日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ信教ノ自由ヲ有ス

(澳)第一篇第十四條ニ曰ク法教及靈知ノ自由ハ全國人民ノ爲メニ之レヲ保固トス

民權及ヒ政權ノ享有ハ人民奉スル所ノ宗旨ノ如何ニ拘ハルヲナシ然レモ何レノ場合ヲ論セス法教ノ自由ヲ行フカ爲メニ國民タルノ義務ヲ缺クヲ得ス

(合)補正第一節ニ曰ク國會ハ人民信教ノ自由ニ關スル法律ヲ制定スルヲ得ス

(普)第十二條ニ曰ク奉教ハ自由ナリ○民權政權ノ享有ハ各民奉スル所ノ教旨ノ如何ニ關スルコトナシ但シ奉教ノ自由ハ以テ民事政事ノ義務ヲ妨ク可カラス

(白)第十四條ニ曰ク宗教ノ自由禮拜公行ノ自由及ヒ一切ノ方法ヲ用ヒテ意志ヲ著ハス自由ハ保固トス但シ其ノ自由ヲ行フニ因テ犯シタル罪過ノ懲罰ハ此例ニアラス

第二十九條 日本臣民ハ法律ノ範圍内ニ於テ言論著作印行集會及結社ノ自由ヲ有ス

(伊)第二十八條ニ曰ク出版ハ自由タリ然レモ一ノ法律ニ由テ惡弊ヲ防制スルコトヲ得

同第三十二條ニ曰ク戎器ヲ携フルニアラスシテ平穩ニ集會スルノ權ヲ有ス然レモ此ノ權ヲ行フニハ公益ノ爲メニ定メタル法律ニ循フ可シ

(澳)第一章第十二條ニ曰ク澳地利國民ハ集會及結社ノ權ヲ有ス此ノ權ノ受用ハ別法之ヲ定ム

同第十三條ニ曰ク各人民ハ法律ニ定メタル制限ヲ守リ言語文字、印刷、繪畫ニヨリ自由ニ其思想ヲ述ルノ權ヲ有ス又著刻ノ自由ニ監查若クハ前許ノ制限ヲ設ケス

(合)補正第一章ニ曰ク國會ハ言論出版ノ自由及ヒ人民平和ニ集會スルノ權利ヲ妨クルノ法律ヲ制定スルヲ得ス

(白)第十八條ニ曰ク出版ハ自由ニシテ監查法ヲ設ルコトヲ得ス

同第十九條ニ曰ク凡ソ白耳義人ハ兵器ヲ携ヘスシテ平穩ニ集會スルノ權ヲ有ス

同第二十條ニ曰ク白耳義人ハ結社ノ自由ヲ有ス此ノ權ハ何等ノ防制方法ニモ從フコトナシ

(普)第二十七條ニ曰ク凡ソ普魯西國民タル者ハ言論、文章、印刷、繪畫ヲ用ヒテ自由ニ其ノ意志ヲ表示スルノ權ヲ有ス○監督ノ法ヲ設

クルヲ得ス○其他出版自由ノ制限ハ議院ノ議定ニ由ルニ非レ
ハ設クルヲ得ス

同第二十九條ニ曰ク凡ソ普國々民ハ豫メ官ノ許可ナシト雖モ戎
器ヲ携フルヲナク平穩ニ開閉ノ裡ニ於テ集會スルノ權ヲ有ス

同第三十條ニ曰ク凡ソ普國民ハ刑法ニ觸レサル旨趣ノ會社ヲ結
ブノ權ヲ有ス

第三十條 日本臣民ハ相當ノ敬禮ヲ守リ別ニ定ムル所
ノ規程ニ從ヒ請願ヲ爲スコトヲ得

(澳)第一章第十一條ニ曰ク凡ソ國民ハ皆請願ノ權ヲ有ス

(合)補正第一章ニ曰ク國會ハ人民請願ノ權利ヲ妨クル法律ヲ制定
スルヲ得ス

(英)權利法典第一條第五項ニ曰ク凡ソ人民ハ帝王ニ訴願スルノ權

利アリ故ニ帝王ニ直訴シタルヲ以テ之レヲ禁錮スルハ違法ナリ

(白)第二十一條ニ曰ク各人ハ一名若クハ衆名ノ上言書ヲ進ムルノ
權ヲ有ス

(普)第三十二條ニ曰ク凡ソ普國々民ハ上言ノ權ヲ有ス

第三十一條 本章ニ掲ケタル條規ハ戰時又ハ國家事變
ノ場合ニ於テ天皇大權ノ施行ヲ妨クルコトナシ

(普)第百十一條ニ曰ク内外戰亂危險ノ日ニ當テハ憲法ノ第五條(人
身ノ自由ハ保固トス)第六條(住居ハ侵スヘカラサル者トス)第七條

(何人モ其ノ正當ナル法律ノ保護ヲ阻碍セララル、コトナカル可シ)

第二十七條(普魯西國民タル者ハ言論、文章、印刷、繪畫ヲ用ヒテ其ノ
自由ニ其ノ意志ヲ表示スルノ權利ヲ有ス)第二十八條(言論、文章、印
刷、繪畫ニ依テ犯シタル罪ハ刑法ノ條文ニ循テ處斷ス)第二十九條

(凡ソ普魯西國民ハ豫メ官ノ許可ナシト雖モ戎器ヲ携フルナク平穩ニ開閉ノ裡ニ於テ集會スルノ權ヲ有ス)第三十條(凡ソ普國々民ハ刑法ニ觸レサル旨趣ノ會社ヲ結フノ權ヲ有ス)第三十二條(凡ソ普國々民ハ上言ノ權ヲ有ス)第三十三條(信書ノ祕密ハ侵ス可カラス)第三十六條(軍兵ハ法律ニ定メタル時機ニ於テシ其定メタル規程ニ循ヒ文官ノ請求ニ因ル場合ノ外内亂制壓ノ爲メ用ヒラル、コトナシ)ハ臨時適宜ノ處分ヲ要スル時ニ限り其時間及其地方ニ在テ其ノ効力ヲ失フ可シ

第三十二條 本章ニ掲ケタル條規ハ陸海軍ノ法令又ハ紀律ニ牴觸セサルモノニ限り軍人ニ準行ス

(普)第三十九條ニ曰ク第五條第六條第廿九條第三十條第三十二條ハ軍律ト相離レサル者ヲ除クノ外軍兵ニ適用セス

第三章 帝國議會

第三十三條 帝國議會ハ貴族院衆議院ノ兩院ヲ以テ成立ス

伊國ノ國會ハ元老院下院ノ兩院ヲ以テ成立ス

獨逸ノ國會ハ上院下院ノ兩院ヲ以テ成立ス

澳國帝國議會上院下院ノ二局ヲ以テ組織ス

合衆國會ハ上院下院ノ兩院ヨリ成ル

英國國會ハ貴族院庶民院ノ兩院ヨリ成ル

佛國國會ハ元老院代議院ノ兩院ヲ以テ成ル

白耳義國會ハ元老院下院ノ兩院ヲ以テ成ル

第三十四條 貴族院ハ貴族院令ノ定ムル所ニ依リ皇族華族及勅任セラレタル議員ヲ以テ組織ス

〔參照〕

貴族院令ニ依ルニ貴族院ハ左ノ議員ヲ以テ組織ス

一 皇族

二 公侯爵

三 伯子男爵各々其ノ同爵中ヨリ選舉セラレタル者

四 國家ニ勳勞アリ又ハ學識アル者ヨリ特ニ勅選セラレタル者

五 各府縣ニ於テ土地或ハ工業商業ニ付多額ノ直接國稅ヲ納ムル者ノ中ヨリ一人ヲ互選シテ勅任セラレタル者

(同令第二條)皇族ノ男子成年ニ達シタル時ハ議席ニ列ス

(同令第三條)公侯爵ヲ有スル者滿二十五歳ニ達シタルトキハ議員タルヘシ

(同令第四條)伯子男爵ヲ有スルモノニシテ滿二十五歳ニ達シ各其ノ同爵ノ選ニ當リタル者ハ七ヶ年ノ任期ヲ以テ議員タル可シ

其ノ選舉ニ關スル規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之レヲ定ム

前項議員ノ數ハ伯子男爵各其總數ノ五分ノ一ヲ超過スヘカラ

(同令第五條)國家ニ勳勞アリ又ハ學識アル滿三十歳以上ノ男子ニシテ勅任セラレタル者ハ終身議員タルヘシ

(同令第六條)各府縣ニ於テ滿三十歳以上ノ男子ニシテ土地或ハ工業商業ニ付多額ノ直接國稅ヲ納ムル者十五人ノ中ヨリ一人ヲ互選シ其ノ選ニ當リ勅任セラレタル者七ヶ年ノ任期ヲ以テ議員タルヘシ

(伊)第三十三條ニ曰ク元老院ニ定員ナシ國王ヨリ終身間選任シタル議員ヨリ成ル元老院ノ議員ハ滿四十歳ニシテ且ツ左ニ列舉スル各種ノ内ヨリ選任スヘシ

- 一 督教、副督教
- 一 下院議長
- 一 三周會間即六年間在職ノ代議員
- 一 國務大臣
- 一 諸省大臣
- 一 第一等全權公使
- 一 三年間第二等全權公使タル者
- 一 大審院及ヒ「シヤムブルテコント」會計裁判所ノ第一等及ヒ第二等ノ上席人
- 一 控訴院ノ第一等上席人
- 一 五年間大審院ノ大代言人及ヒ大檢事タル者
- 一 三年間控訴院ノ一課ノ上席人タル者

- 一 五年間控訴院ノ大代言人及ヒ大檢事タル者
 - 一 海陸軍ノ大將及ヒ五年間在職ノ少將
 - 一 五年間參議官タル者
 - 一 三度參議院ノ一課ノ上席人ニ選マレタル參議官
 - 一 七年間監察官タル者
 - 一 七年間學士會院ニ在ル者
 - 一 七年間文部次官タル者
 - 一 勳勞アル者及ヒ材能德望アル者
 - 一 財産或ハ職業ニ因テ三年間三千「リール」(凡ソ我ニアルハ)以上ノ直稅ヲ納ムル者
- 同第三十四條ニ曰ク王族ハ元老院議員タルノ權ヲ有ス其ノ列席ノ坐次ハ議長ノ下ニ斑スヘシ滿二十歳ニシテ院中ヘ參入シ滿二

十五歳ニシテ公議ノ權ヲ有ス

○澳國上院ノ組織

同國憲法第二篇第二條ニ曰ク成年ノ皇族ハ門地ニ依リ上院議會ニ入ル

(同第三條)本國ノ貴族ニシテ財産ニ富ミ皇帝ヨリ上院世襲議員ノ稱ヲ授ケラレタル成年ノ家主ハ世襲ノ議員タリ

(同第四條)凡ソ帝國貴族ノ稱ヲ有スル大僧正僧正ハ高僧ノ官ニ在ル故ヲ以テ上院議員タリ

(同第五條)皇帝ハ國事宗教文學若クハ技術上ニ於テ著名ノ學士ヲ上院ノ終身議員ニ任スルノ權ヲ有ス

○合衆國元老院ノ組織

同國憲法第一條第三節ニ曰ク合衆國元老院ハ各州ノ立法院ヨリ

其州ノ大小ヲ問ハス各二名宛六ヶ年ノ任期ヲ以テ選舉シタル元老院議員ヲ以テ之レヲ組織シ而シテ元老院ハ各々一個ノ投票ヲ爲シ得ルモノトス合衆國元老院議員タルヲ得ルモノハ年齢三十歳ニ達シ九ヶ年間國民籍ニアリ且ツ其ノ選舉セラル、時其選舉セラル、州ノ住民タルモノニ限ルヘシ

○普魯西上院ノ組織

千八百五十四年十月十二日ノ法令ニ依ルニ上院ノ議員タル者ハ

第一 王族

第二 貴族

第三 國王ヨリ命シタル終身議員

○白耳義上院ノ組織

同國憲法第五十六條ニ曰ク上院議員ノ選ニ當ル爲メニハ左ノ資

格ヲ備フルヲ要ス

第一 生レテ白耳義人タル事或ハ大歸化ノ許ヲ得タル者

第二 政權及ヒ私權ヲ享有スル事

第三 白耳義國ニ住ム事

第四 白耳義國ニ於テ直税千「フローリン」以上ヲ納ムル事

○佛蘭西元老院ノ組織

佛蘭西國元老院議員タルノ資格ハ唯佛國人ニシテ年齡四十歲以上ヲ要スルノミ

第三十五條 衆議院ハ選舉法ノ定ムル所ニ依リ公選セラレタル議員ヲ以テ組織ス

〔参照〕

衆議院議員選舉法第三章被選人ノ資格

(第八條)被選人タルコトヲ得ル者ハ日本臣民ノ男子滿三十歲以上ニ

シテ選舉人名簿調製ノ期日ヨリ前滿一年以上其ノ選舉府縣内ニ於テ直接國稅十五圓以上ヲ納メ仍引續キ納ムル者タル可シ

但所得稅ニ付テハ人名簿調製ノ期日ヨリ前滿三年以上之レヲ納メ仍引續キ納ムル者ニ限ル

(第九條)官内官、裁判官、會計検査官、收稅官及ヒ警察官ハ被選人タルコトヲ得ス

前項ノ外ノ官吏ハ其ノ職務ニ妨ケサル限リハ議員ト相兼ルコトヲ得

(第十條)府縣及郡ノ官吏ハ其ノ管轄區域内ニ於テ被選人タルコトヲ得ス

(第十一條)選舉人ノ管理ニ關係アル市町村ノ吏員ハ其選舉區ニ於テ被選人タルコトヲ得ス

(第十二條)神官及諸宗ノ僧侶又ハ教師ハ被選人タルコトヲ得ス
(第十三條)府縣會ノ議員ニシテ衆議院ノ議員ニ選舉セラレ當選ヲ承諾シタルトキハ其ノ前職ヲ辭スヘキモノトス

第四章 選舉人及被選人ニ通スル規定

(第十四條)左ノ項ノ一ニ觸ル、者ハ選舉人及被選人タルコトヲ得ス

- 一 瘋癲白癡ノ者
- 二 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者
- 三 公權ヲ剝奪セラレタル者又ハ停止中ノ者
- 四 禁錮ノ刑ニ處セラレ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

五 舊法ニ依リ一年以上ノ懲役若クハ國事犯禁獄ノ刑ニ處セラ

レ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者
六 賭博犯ニ由リ處刑ヲ受ケ滿期ノ後又ハ赦免ノ後滿三年ヲ經サル者

七 選舉ニ關ル犯罪ニ由リ選舉權及被選權ノ停止中ノ者

(第十五條)陸海軍人ハ現役中選舉權ヲ行フコトヲ得ス及ヒ被選人タルコトヲ得ス其ノ休職停職ニ在ル者亦同シ

(第十六條)華族ノ當主ハ衆議院議員ノ選舉人及被選人タルコトヲ得ス

(第十七條)刑事ノ訴ヲ受ケ拘留又保釋中ニ在ル者ハ其裁判確定ニ至ル迄選舉權ヲ行フコトヲ得ス及ヒ被選人タルコトヲ得ス

(伊)第四十條ニ曰ク國王ノ支配ヲ受ケ滿三十歳ニシテ政權民權ヲ享有シ法律ノ規程ニ適スル者ニ非サル代議員ハ議院ニ參席ス可

カラス

(白)第五十條ニ曰ク代議士ノ選ニ當ル者ハ左ノ資格ヲ要ス

第一 生レテ白耳義人タル事若クハ大歸化ノ許ヲ受ケタル事

第二 私權及公權ヲ享有スル事

第三 滿二十五歳以上ナル事

第四 白耳義ニ居住スル事

(獨)第二十條ニ曰ク下院ハ祕密ノ投票ニ由リ全國ノ直接ナル選舉ヲ以テ編制ス

(合)第一條第二節ニ曰ク代議士院ノ議員ハ二年毎ニ各州ノ人民ヨリ選舉ス可シ而シテ其ノ各州ニ於テ議員ヲ選フ者ハ各州内ニ於ケル立法部ノ議員ヲ選舉スル人ト同一ナル選舉資格ヲ有スルモノナルコトヲ要ス

合衆國代議士院ノ議員タルヲ得ヘキモノハ年齢二十五歳ニ達シ七年間合衆國民トナリ且ツ其ノ選舉セラレ、時其選舉セラレ、州ノ住民タル者ニ限ルヘシ

(普)第三十四條ニ曰ク凡ソ普國々民ハ滿三十歳ニシテ國民權(私公權)ヲ失ハス而シテ三年ノ間兵役ニ服シタルモノ及ヒ一年ノ間普國ニ住シタル者ハ代議士ノ選ニ當ルコトヲ得

各國議員選舉人被選人年齢比較表

國名	選舉人	被選人
澳國	二十四歳	二十四歳
白耳義	二十一歳	二十五歳
佛國	二十一歳	二十五歳
英國	二十一歳	二十一歳

普國	二十五歲	三十歲
伊國	二十一歲	三十歲
合衆國	二十一歲	二十五歲

第三十六條 何人モ同時ニ兩議院ノ議員タルコトヲ得ス

(伊)第六十四條ニ曰ク凡ソ議員ハ兩院ノ議員ヲ兼任スルコトヲ得ス

(獨)第九條ニ曰ク凡ソ議員ハ同時ニ上院下院ノ議員ヲ兼ヌルコトヲ得ス

(澳)第二篇第一條中ニ曰ク何人モ上下兩院ノ議員ヲ兼ス任スルコトヲ得ス

(白)第三十五條ニ曰ク一人ニシテ兩院ノ議員ヲ兼ヌルヲ得ス

(普)第七十八條中ニ曰ク何人モ兩院ノ議員ヲ兼ヌルコトヲ得ス

第三十七條 凡テ法律ハ帝國議會ノ協贊ヲ經ルヲ要ス

(獨)第五條ニ曰ク帝國ノ立法權ハ上院下院共同シテ之ヲ行フ兩院ノ過半数決定ノ諧同ハ帝國法律ノ爲メニ緊要ニシテ之レヲ以テ足レリトス

(澳)第二篇第十三條中ニ曰ク何レノ場合ニ於テモ法律ニ眞確不易ノカヲ易フルニハ上下兩院ノ諧同ト皇帝ノ批准トヲ必要トス
(普)第六十三條中ニ曰ク王ト兩院トノ同意ハ新法ヲ發スル毎ニ欠ク可カラサルモノトス

第三十八條 兩議院ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決シ及各法律案ヲ提出スルコトヲ得

第三十九條 兩議院ノ一ニ於テ否決シタル法律案ハ同

會期中ニ於テ再ヒ提出スルコトヲ得ス

(伊)第五十六條ニ曰ク立法權ノ三派(國王上院下院)ノ何レニ於テモ一度否拒シタル法案ノ發議ハ同時ノ集會ニ於テ復々用フルコトヲ得ス
(普)第六十四條ニ曰ク兩院ノ一若クハ國王ヨリ斥ケタル法律草案ハ其同一ノ會期ニ於テ再進スルコトヲ得ス

第四十條 兩議院ハ法律又ハ其ノ他ノ事件ニ付各其ノ意見ヲ政府ニ建議スルコトヲ得但シ其ノ採納ヲ得サルモノハ同會期中ニ於テ再ヒ建議スルコトヲ得ス
第四十一條 帝國議會ハ每年之ヲ召集ス

(伊)第九條ニ曰ク國王ハ每歲兩院ヲ徵集ス

(獨)第十三條ニ曰ク上院及下院ノ徵集ハ每歲必ス之ヲ爲スヘシ

(澳)第二篇第十條ニ曰ク帝國議會ハ成ルヘク丈每歲冬月ニ皇帝之

レヲ召集ス

(白)第七十條ニ曰ク兩院ハ每年十一月第二ノ火曜日ニ之レヲ開クノ權ヲ有ス其前ニ國王ヨリ徵集シタルト否トヲ論セサルモノトス

第四十二條 帝國議會ハ三ヶ月ヲ以テ會期トス必要アル場合ニ於テハ勅命ヲ以テ之ヲ延長スルコトアルヘシ

第四十三條 臨時緊急ノ必要アル場合ニ於テ常會ノ外臨時會ヲ召集スヘシ

臨時會ノ會期ヲ定ムルハ勅命ニ依ル

佛國千八百七十五年七月十六日公權力ノ關係ニ付テノ法律第二條ニ曰ク大統領ハ臨時ニ兩院ヲ召集スルノ權利アリ○若シ休會

中ニ各院議員ノ完全ノ多數ニヨリ招集ヲ請求スル時ハ大統領ハ
兩院ヲ招集セサルヲ得ス

第四十四條 帝國議會ノ開會閉會會期ノ延長及停會ハ
兩院同時ニ之ヲ行フヘシ
衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ貴族院ハ同時ニ停
會セララルヘシ

(伊)第九條ニ曰ク國王ハ每歲兩院ヲ徵集シ又ハ集會ヲ延ハス
同第四十八條ニ曰ク各院ノ集會ハ同時トス

一ノ議院ノ集會セサル時他ノ議院ノミ集會スルハ法律ニ循由セ
サル者ニシテ其効ヲ有セス

第四十五條 衆議院解散ヲ命セラレタルトキハ勅命ヲ
以テ新ニ議員ヲ選舉セシメ解散ノ日ヨリ五ヶ月以内

ニ之ヲ召集スヘシ

(伊)第九條中ニ曰ク下院ヲ解散シタルキハ解散ノ日ヨリ四ヶ月内
ニ更ニ下院ヲ徵集スヘシ

(獨)第二十五條ニ曰ク下院ヲ解散シタル場合ニ於テハ解散シタル
日ヨリ六十日ノ間ニ選舉人ヲ徵集シ九十日ノ間ニ更ニ復タ下院
ヲ徵集スヘシ

(普)第五十一條中ニ曰ク國王ハ解散ノ日ヨリ六十日ノ内ニ選舉人
ヲ徵集シ而シテ九十日ノ内ニ議會ヲ召集スヘシ

第四十六條 兩議院ハ各其ノ總議員三分ノ一以上出席
スルニ非サレハ議事ヲ開キ議決ヲ爲スコトヲ得ス

(伊)第五十三條ニ曰ク各院ノ議員過半數列席セサル時ハ集會及ヒ
會議ハ其効ヲ奏セス

(普)第八十條ニ曰ク各院若シ法ニ定メタル所ノ過半数出頭セサル時ハ議決ヲ舉クルコトヲ得ス

第四十七條 兩議院ノ議事ハ過半数ヲ以テ決ス可否同數ナルトキハ議長ノ決スル所ニ依ル

(伊)第五十四條ニ曰ク各院ハ過半数ヲ以テ可否ヲ決ス

第四十八條 兩議院ノ會議ハ公開ス但シ政府ノ要求又ハ其ノ院ノ決議ニ依リ秘密會ト爲スコトヲ得

(伊)第五十二條ニ曰ク各院ノ集會ハ公行トス然レモ議員十人以上ノ求メニ由リ秘密會議ヲ行フコトヲ得

(澳)第二篇第二十三條ニ曰ク上下兩院ノ會議ハ公行トス然レトモ兩院ハ議長若クハ少クトモ議員十名以上ノ請求スルニ當リ聽衆ヲ退クルノ後該院ニ於テ之ヲ可ト決スル時ハ特ニ秘密會議ヲ開

クノ權ヲ有ス

(佛)第四十一條中ニ曰ク立法議院ノ會議ハ公開トス然レモ若シ議員五名以上ノ請求アル時ハ議院ノ總員ヲ以テ秘密會議ヲ開クヲ得可シ(本條ハ千八百六十八年七月十八日ノ元老院決定ヲ以テ改正ス)

(白)第三十四條ニ曰ク兩院ノ會議ハ公行トス然レトモ各院其ノ議長又ハ議員十人以上ノ請求ニ依テ秘密會議ヲ行フヲ得

(普)第七十九條ニ曰ク兩院ノ會議ハ公行トス議長若クハ議員十人以上ノ請求ニ依ル時ハ各院ニ於テ秘密會議ヲ行フヲ得且ツ其ノ請求ノ可否ヲ議スルニ亦タ秘密會議ヲ以テス

第四十九條 兩議院ハ各天皇ニ上奏スルコトヲ得

(普)第八十一條ニ曰ク各院ハ自ラ國王ニ上奏スルノ權ヲ有ス

第五十條 兩議院ハ臣民ヨリ呈出スル請願書ヲ受クル
コトヲ得

(伊)第五十七條ニ曰ク成年ノ國民ハ議院ニ向ツテ願書ヲ進呈スル
ノ權アリ

第五十一條 兩議院ハ此ノ憲法及議院法ニ掲クルモノ
、外内部ノ整理ニ必要ナル諸規則ヲ定ムルコトヲ得

(伊)第六十一條ニ曰ク各院ハ自カラ設ケタル條規ニ由テ其職務ヲ
行フニ付テノ方式ヲ定ム

第五十二條 兩議院ノ議員ハ議院ニ於テ發言シタル意
見及表決ニ付院外ニ於テ責ヲ負フコトナシ但シ議員
自ラ其ノ言論ヲ演説刊行筆記又ハ其ノ他ノ方法ヲ以
テ公布シタルトキハ一般ノ法律ニ依リ處分セララルヘ

シ

(伊)第五十一條ニ曰ク各院ノ議員ハ會議ニ於テ發言シタル意見及
ヒ可否ノ投言ヲナシタル爲メニ告訴セラル、ナシ

(英)權利法典第九條中ニ曰ク凡ソ國會ニ於ケル議論ハ忌諱ニ觸ル
、ト雖モ國會外ニ於テ之ヲ糺彈スヘカラス

(自)第四十四條ニ曰ク兩院ノ議員ハ其職ヲ行フニ付テ發言シタル
意見ニ係テ糺治檢索セラル、コトナカルヘシ

(澳)第二篇第十六條中ニ曰ク帝國議會ノ議員ハ決シテ其職務ヲ執
行スル爲メニ行フタル公評ノ責ニ任セス獨リ其ノ隸屬スル院ニ
對シ職務ヲ執行スル爲メ發議スルノ責ニ任スルノミ

(普)第八十四條ニ曰ク議員ハ公評ノ爲メ及ヒ院中ニ於テ發議シタ
ル意見ノ爲メニ審糾セラル、コトナシ

(合)第一條第六節中ニ曰ク議員ハ院内ニ於テ爲シタル演説或ハ討論ノ爲メニ議院外ノ場所ニ於テ詰問セララル、コトナシ

第五十三條 兩議院ノ議員ハ現行犯罪又ハ内亂外患ニ關ル罪ヲ除ク外會期中其ノ院ノ許諾ナクシテ逮捕セララル、コトナシ

(伊)第三十七條ニ曰ク元老院議員タルモノハ現行犯罪ヲ除クノ外同院ノ命令ニ由ルニ非サレハ拿捕スルコトヲ得ス又同第四十五條ニ曰ク現行犯罪ヲ除クノ外一周會ノ間ハ下院議員ヲ拿捕スルコトヲ得ス

(獨)第三十一條ニ曰ク現行犯罪ニ非ス又ハ二十四時間ニ拿捕スルニ非サレハ下院ノ承認ヲ得スシテ下院ノ議員ハ集會ノ時間罰ス可キ事件ノ爲メニ裁判所ニ提喚セラレ及拿捕セララル、コトヲ得

ス

(澳)第二篇第十六條中ニ曰ク凡ソ帝國議會ノ議員ハ其會議ノ際ニ於テ現行犯罪ノ場合ヲ除キ本人ノ隸屬スル院ノ承允ヲ得ルコトナク司法上ノ手續ヲ以テ之ヲ拿捕シ若クハ糺治スルコトヲ得ス(普)第八十四條中ニ曰ク凡ソ議員ハ開會間刑事ニ觸レタル犯罪アリト雖モ本院ノ許可ナクシテ之レヲ糾治勾捕スルコトヲ得ス

但シ即日或ハ翌日發見サレタル現行犯ハ此限リニアラス

(合)第一條第六節中ニ曰ク議員ハ反逆重罪若クハ國安妨害ノ罪ヲ犯シタルニ非サルヨリハ凡ソ何等ノ場合ニ於ケルモ各其ノ議院ノ會議ニ出席中并ニ議院ヘ往復ノ途上ニ於テハ逮捕セラレサルノ特許ヲ有ス

第五十四條 國務大臣及政府委員ハ何時タリトモ各議

院ニ出席シ及發言スルコトヲ得

(佛)第五十一條ニ曰ク參議官ハ政府ノ名代ト爲リテ元老院及ヒ議院ニ對シ法律ノ議案ヲ論辨ス可シ

(英)英國ノ各省大臣ハ各議院ニ出席シテ意見ヲ述フルヲ得

(普)第六十條ニ曰ク諸大臣並ニ大臣ノ代理タル諸官ハ兩議院ニ參列ノ權ヲ有シ而シテ其發言ヲ願フコトアル毎ニ議院ハ必ス之ヲ聞ク可シ又各議院ハ諸大臣ノ出頭ヲ請求スルヲ得

(白)第四十三條三項ニ曰ク諸大臣ハ議院ノ求メアル毎ニ必ス其上言書中載スル所ノ事件ノ上ニ辨明ヲ爲ス可シ

第四章 國務大臣及樞密顧問

第五十五條 國務各大臣ハ天皇ヲ輔弼シ其ノ責ニ任ス凡テ法律命令其ノ他國務ニ關ル詔勅ハ國務大臣ノ副

署ヲ要ス

(佛)第十三條ニ曰ク宰相ハ國ノ長ニ屬スルモノニシテ政府ノ所爲中自己ニ管スル事務ニ付キ各自ニ其責ニ任シ相連帶シテ責ニ任スルコトナク且其罪ハ元老院ノ外之ヲ告訴ス可ラス

(英)英國ニテハ法律ノ明文ナキモ慣習上内閣諸大臣ハ連帶責任ヲ負フモノトス

(普)第四十四條ニ曰ク國王ノ内閣諸大臣ハ責ニ任ス可キモノトス

(獨)第十七條末項ニ曰ク皇帝ノ命令規則ハ帝國ノ名義ヲ以テ布告ス而シテ其効力ヲ有スル爲メニ大臣ノ花押ヲ必要トス之レカ爲メニ大臣ハ其責ニ任ス

(澳)憲法第二條ニ曰ク皇帝ハ責任ノ大臣及之レニ隸屬スル官吏ニ依テ大政權ヲ行フ

(白)第六十三條ニ曰ク國王ノ身ハ侵ス可ラサルモノトス國王ノ諸大臣ハ責ニ任ス可キモノトス

第五十六條 樞密顧問ハ樞密院官制ノ定ムル所ニ依リ天皇ノ諮詢ニ應ヘ重要ノ國務ヲ審議ス

(佛)第五十條ニ曰ク參議官ハ共和政治ノ大統領ノ指令ヲ受ケ法律ノ議案及ヒ行政ノ規則ヲ記シ且政治ノ諸務ニ付キ生ス可キ難事ヲ理治スルヲ任ス可シ

(英)英國ニモ樞密院アリト雖ヒ其勢力甚々薄ク殆ント有名無實ノモノト爲リ居レリ

第五章 司法

第五十七條 司法權ハ天皇ノ名ニ於テ法律ニ依リ裁判所之ヲ行フ

裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(佛)第七條ニ曰ク裁判ハ大統領ノ名ヲ以テ之ヲ行フ

(英)英ノ國法ニテハ帝ハ眞理ノ淵源ト云フ故ニ裁判權ハ常ニ帝ノ到ル所ニ從フ

(普)第八十六條ニ曰ク司法權ハ不羈ノ諸法衙ニ依リ國王ノ名ヲ以テ之ヲ施行ス諸法衙ハ法章ヲ除クノ外他ノ權威ニ從フヲナシ

(澳)第五篇第一條ニ曰ク凡國內ノ裁判ハ皇帝ノ名ヲ以テ決行ス上下等法院ノ處斷ハ皇帝ノ名ニ於テ之ヲ行フ

(合)第三條第一節ニ曰ク合衆國執法ノ權ハ之ヲ一大法局并ニ議員隨時定ムル小法局ニ付シ而シテ大小法局判官行ヒ正シケレバ永ク其職ヲ保チ其勞ニ報酬ヲ受ク

(伊)第六十八條ニ曰ク凡裁判ハ國王ノ任シタル裁判官ニ由リ王名

ヲ以テ宣告ス

第五十八條 裁判官ハ法律ニ定メタル資格ヲ具フル者

ヲ以テ之ニ任ス

裁判官ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルノ外其ノ職ヲ免セララルヽコトナシ

懲戒ノ條規ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(佛)第四十九條ニ曰ク國王ヨリ委任シタル裁判役ハ終身任ス可キモノニシテ之ヲ免職スル能ハス

(英)審判官ハ一旦之レニ任セラレタル以上ハ犯罪惡行等アルカ又ハ兩議員連署シテ之ヲ退ケント言ヒ出テタル者等ニアラサレハ之ヲ退免ス可ラス

(普)第九十條ニ曰ク法ニ掲ケタル條規ニ從ヒ能力アリトスルモノ

ニアラサレハ法官ニ任スルヲ得ス

同第八十七條ニ曰ク諸法官ハ國王ニ依リ或ハ國王ノ名ヲ以テ終身ヲ期シ選任ス諸法官ハ法章ニ定メタル事故ノ爲メニ審判ヲ受ケタルヲ除ク外官ヲ免シ及職外官トスルヲ得ス審問中職外官ト爲シ及本人願ハサルノ轉所及老退ヲ命スルハ法章ニ定メタル事故ノ爲メニシ法章ニ定メタル規程ニ從ヒ而シテ審判ニ由ルニアラサレハ之ヲ行フコトヲ得ス但シ事務ノ爲メ已ムヲ得サルノ轉所ハ此ノ限ニアラス

(澳)第二條ニ曰ク法院ノ構成及ヒ權限ハ法律ヲ以テ定ム可シ

同第六條ニ曰ク判司ハ不羈獨立ナリ法律ニ掲ケタル場合ニ於テシ及公正ナル審判ノ故ニアラサレハ之ヲ免黜スルヲ得ス法院ノ長官若クハ上等法院ノ命令ニ由ルニアラサレハ判司ヲ停職ス

ルヲ得ス但シ同事ニ訴事ヲ當該ノ判司ニ移スヲ要ス法律ニ定メタル場合ニ於テシ且之レニ掲ケタル規程ニ準シ審判ニ由リ本人願ハサル轉所若クハ退老ヲ命スルモ亦同シ

(合)第七節ニ曰ク裁判官ハ大統領之ヲ任命シ元老院此ノ任命ヲ確認ス善行執務ノ間ハ永久在職ス可キモノトシ在職中ハ其俸給ヲ減セラル、コトナシ而シテ裁判官ハ年齢七十二達スレハ滿十ヶ年在職セル者ニ限り退職シテ在職間ト同様ノ俸給ヲ受クルコトヲ得

(白)第百條ニ曰ク法官ハ終身ニマテ任ス、法官ハ審判ニ依ルニアラサレハ職ヲ免シ及職ヲ停ムルコトナシ、新任人員アリテ然シテ本人許諾スルニ非サレハ法官ノ轉所アルコトヲ得ス

(伊)第六十九條ニ曰ク郡裁判所ヲ除クノ外國王ノ任シタル裁判官

ノ三年間在職シタル者ハ復轉免ス可ラス

第五十九條 裁判ノ對審判決ハ之ヲ公開ス但シ安寧秩序又ハ風俗ヲ害スルノ虞アルトキハ法律ニ依リ又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ對審ノ公開ヲ停ムルコトヲ得

(佛)第八十一條ニ曰ク裁判ノ事件ニヨリ國ノ取締及風儀ヲ害シテ公ノ裁判ヲ爲ス能ハサル場合ノ外凡テ裁判ノ席ニ必ス來聽ヲ許ス可シ但シ公ニ裁判ヲ爲ス能ハサルトキハ裁判役ハ格段ノ裁判言渡ヲ以テ其旨ヲ公告ス可シ

(普)第九十三條ニ曰ク民事トナク法術ノ訟廷ハ公聽ヲ許ス内行事件ノ爲メニハ公聽ヲ停ムルヲ得其他ノ場合ニ於テハ公聽ヲ制限スルハ必ス法章ニ依ル

(英)英國モ亦此ノ點ニ付テハ更ニ異ナルコトナシ

(澳)第十條ニ曰ク民事刑事ノ別ナク裁判ヲ任セラレタル判司ノ前ニ於テスル訴訟ハ言語ヲ以テシ及公行トス何レノ場合ニ於テモ右ノ通規ニ係ラス特例ヲ用ユルヲ得可キヤハ法律ニ於テ之ヲ定ム

(合同國憲法ニハ特別ニ此ノ明文ヲ設クルコトナキモ他ノ諸國ト同一ナリ

(白)第九十六條ニ曰ク諸法衙ノ訟廷ハ公行トス但政治若クハ内行ノ爲メニ害アル可キモノハ此ノ限リニアラス而シテ其時ニハ裁判ニ由テ法衙ヨリ公行ヲ停ムルヲ宣告ス國事犯ニ付テハ陪審員ノ同意ヲ得ルニアラサレハ閉戸ヲ宣告スルヲ得ス

(伊)第七十二條ニ曰ク民事刑事トナク裁判所ノ訟廷ハ法律ニ由テ公行トス

第六十條 特別裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第六十一條 行政官廳ノ違法處分ニ由リ權利ヲ傷害セラレタリトスルノ訴訟ニシテ別ニ法律ヲ以テ定メタル行政裁判所ノ裁判ニ屬スヘキモノハ司法裁判所ニ於テ受理スルノ限ニ在ラス

(佛)施政官ト裁判官トノ權限抵觸ノ爭論ハ覆審院ノ裁判役並ニ國議院ノ議官ヲ以テ編成シタル常外裁判所一箇所ニ於テ之ヲ裁斷ス可シ但覆審院及國議院ハ三箇年目ニ己ノ院中ヨリ其裁判所ヘ勤ム可キ官員ヲ選任ス可キモノニシテ雙方同數ノ官員ヲ任スヘシ

(澳)凡ソ行政官既成ノ法律ニ由リ又嗣後制定ス可キ法律ニ因リ人

民相互ノ告訴ヲ裁決スルノ權ヲ有スル場合ニ當リ此ノ裁決ニヨリ權利ヲ侵サレタル一方ノモノハ司法上ノ普通手續ヲ以テ自由ニ相手方ノ者ニ對シ控訴スルヲ得此ノ場合ニ於テ行政官ノ裁決ニ由リ權利ヲ侵サレタル者ハ凡テ行政官ノ代理人ニ對シ行政裁判上應ニ控訴シ公ニ言語ヲ以テ論辨スルヲ得行政裁判上應ニ於テ審理ス可キ場合及其設立并ニ訴訟手續ハ別法ヲ以テ之ヲ定ム可シ

第六章 會計

第六十二條 新ニ租稅ヲ課シ及稅率ヲ變更スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ
但シ報償ニ屬スル行政上ノ手数料及其ノ他ノ收納金ハ前項ノ限ニ在ラス

國債ヲ起シ及豫算ニ定メタルモノヲ除ク外國庫ノ負擔トナルヘキ契約ヲ爲スハ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ

(佛)第四十條ニ曰ク凡租稅ハ兩院ニ於テ之ヲ承諾シ國王之ヲ確定シタル後ニアラサレハ之ヲ定メ及收納ス可ラス

同第四十一條ニ曰ク地稅ハ一年ノ爲メノミ之ヲ決議ス可シ不直稅ハ數年ノ爲メ之ヲ決議スルヲ得可シ

同第六十一條ニ曰ク國債ハ保證シタル者トス全體政府ヨリ國債主ニ對シテ爲シタル所ノ約束ハ相違背ス可ラサル者ナリ

(普)第九十九條ニ曰ク國ノ費額及入額ハ必ス豫メ計算シテ國計表ニ記載ス可シ

國計表ハ必ス毎年之ヲ定ム可シ

同第三百三條ニ曰ク法ニ由ルニ非サレハ國債ヲ起スヲ得ス其他

凡ソ政府ノ保證ニ係ルモノ並ニ之ニ同シ

(伊)第三十條ニ曰ク兩院ノ議決及ヒ國王ノ許可ナクシテ租稅ヲ賦課ス可ラス

(英)大憲章第十二條ニ曰ク補助費ヲ英國内ニ賦課スルキハ必ス國會ノ決議ヲ要ス

(合)第二節第三項ニ曰ク合衆國代議士院ノ議員ヲ出ス可キ數及合衆國ノ公費ニ充ツ可キ直接稅ハ各州ノ人口ニ應シ此ノ合衆國ヲ組織スル十三州ニ分任賦課ス可シ然シテ各州ノ人口ハ其自由人民ノ全數租稅ヲ負擔セサル印度人種ヲ除クト年期雇人トヲ合算シ且ツ自由ヲ享有セサル所ノ人民(即チ奴隸)モ其五分ノ三ヲ加算ス可キモノトス

(白)第百十一條ニ曰ク國稅ハ毎年公議ス國稅ヲ定ムルノ法章ハ其

効力ヲ有スルコト一年ニ限ル但シ一案ヲ再用スル者ハ此ノ限ニアラス

第六十三條 現行ノ租稅ハ更ニ法律ヲ以テ之ヲ改メサル限りハ舊ニ依リ之ヲ徵收ス

第六十四條 國家ノ歲出歲入ハ毎年豫算ヲ以テ帝國議會ノ協贊ヲ經ヘシ

豫算ノ款項ニ超過シ又ハ豫算ノ外ニ生シタル支出アルトキハ後日議會ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

(佛)第十二條ニ曰ク經費ノ見積書ハ政府ノ各宰相局ニ於テ其入用ノ額ヲ章條ニ分ケ之ヲ議院ニ提出ス可シ
其見積書ハ議院ニ於テ之ヲ決議ス可シ

(英)權利法典ニ曰ク國會ニ於テ許可シタル外ニ帝王ノ特權ト稱シ

妄リニ租税ヲ徴收スルハ違法ナリ

(普)第九十九條ニ曰ク國ノ費額及入額ハ必ス豫メ計算シテ國計表ニ記載ス可シ(來年ノ出入ヲ豫算シテ表冊トナシ議院ノ公議ヲ取ル者之ヲ豫算表ト云フ)國計表ハ必ス毎年之ヲ定ム可シ
同第四百四條ニ曰ク實費國計表ヲ豫ルルキハ兩院ノ承諾ヲ經ルヲ要ス

(白)第百十五條ニ曰ク毎年兩院ハ前年度ニ係ル統計ノ法章ヲ決シ及ヒ豫算ヲ評定ス政府一切ノ出納ハ必ス豫算表及ヒ統計表ニ載ス可シ

第六十五條 豫算ハ前ニ衆議院ニ提出スヘシ

(白)第百十六條四項ニ曰ク國計全表ハ統計院説明ヲ加ヘ兩院ニ付シ議ヲ取ル

(獨)第七十二條ニ曰ク帝國ノ諸入額ヲ費用スルコトニ付キ「ライクスカンツレール」ハ其責任ヲ解ク爲メニ明細ナル豫算表ヲ毎年上院及ヒ下院ニ差出ス可シ

(佛)第三十七條ニ曰ク左ノ事項ハ必ス先ツ下院ニ提出ス可シ

第一 翌年ノ歳入豫算高并ニ各省ノ爲メニ定額金ノ進言ヲ記シタル所ノ國ノ歳出入ノ總勘定書

第二 當年并ニ前年ノ勘定書

第六十六條 皇室經費ハ現在ノ定額ニ依リ毎年國庫ヨリ之ヲ支出シ將來増額ヲ要スル場合ヲ除ク外帝國議會ノ協贊ヲ要セス

第六十七條 憲法上ノ大權ニ基ケル既定ノ歳出及法律ノ結果ニ依リ又ハ法律上政府ノ義務ニ屬スル歳出ハ

政府ノ同意ナクシテ帝國議會之ヲ廢除シ又ハ削減スルコトヲ得ス

第六十八條 特別ノ須要ニ因リ政府ハ豫メ年限ヲ定メ繼續費トシテ帝國議會ノ協贊ヲ求ムルコトヲ得

第六十九條 避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フ爲ニ又ハ豫算ノ外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツル爲ニ豫備費ヲ設クヘシ

第七十條 公共ノ安全ヲ保持スル爲緊急ノ需用アル場合ニ於テ内外ノ情形ニ因リ政府ハ帝國議會ヲ召集スルコト能ハサルトキハ勅令ニ依リ財政上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ次ノ會期ニ於テ帝國議會ニ提出

シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

(獨)第七十一條ニ曰ク帝國ノ諸入費ハ通例一年間ニ定ム可シ然レモ格別ノ場合ニ於テ一年ヨリ長キ時間ニ定ムルヲ得可シ第六十條ニ記載スル所ノ假規則ヲ用フル時間陸軍ノ入費ニ付テ明細ナル豫算表ヲ下院ニ進呈ス可シ

同第七十三條ニ曰ク非常ノ入費アル場合ニ於テハ兩院ノ決定ヲ以テ金額ヲ借り又ハ帝國ノ名義ヲ以テ其負債ヲ保證スルヲ得可シ

第七十一條 帝國議會ニ於テ豫算ヲ議定セス又ハ豫算成立ニ至ラサルトキハ政府ハ前年度ノ豫算ヲ施行スヘシ

(佛)第三十四條ニ曰ク地租家稅ヲ問ハス總テノ直稅ハ一年限リノ

ミ之ヲ決議シ不直税ハ數年ノ爲メ一度ニ決議スルヲ得可シ下院解散スルニ於テ新タル下院集會スル迄ハ其前ノ集會中已ニ決議シタル租税ヲ續テ徵收ス可シ

第七十二條 國家ノ歲出歲入ノ決算ハ會計検査院之ヲ検査確定シ政府ハ其ノ検査報告ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

會計検査院ノ組織及職權ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

(佛)第四百四條ニ曰ク民選議院ヨリ特任シタル委員ハ國帑察ノ勘定役人ヲ検査ス可シ但シ此ノ委員ハ民選議員中ヨリ撰擧ス可ラス且會計上ニ於テ故造アルニ於テハ右委員之ヲ告發ス可シ然ラサレハ其責ニ任ス

同第八十九條ニ曰ク國ニ會計委員ヲ設立シ共和國ノ出入金錢ノ

計算證書ヲ之レニ検査セシム可シ右委員ハ元老院ニ於テ全國連名書中ヨリ選任シタル七人ヲ以テ編制スル者ナリ

(白)第百十六條ニ曰ク統計院ノ官員ハ代議士院之ヲ選任シ法章ニ定ル所ノ任期ヲ以テ代任ス統計院ハ政部全局ノ出納及國庫ヨリ支出スル一切ノ會計ヲ検査精算スルニ任ス

第七章 補則

第七十三條 將來此ノ憲法ノ條項ヲ改正スルノ必要アルトキハ勅命ヲ以テ議案ヲ帝國議會ノ議ニ付スヘシ此ノ場合ニ於テ兩議院ハ各其ノ總員三分ノ二以上出席スルニ非サレハ議事ヲ開クコトヲ得ス出席議員三分ノ二以上ノ多數ヲ得ルニ非サレハ改正ノ議決ヲ爲スコトヲ得ス

(普)第八十條ニ曰ク各院若シ法ニ定メタル所ノ過半数出頭セサル
キハ議決ヲ擧ルコトヲ得ス各院ハ過半数ヲ以テ議決ヲ擧ク但選舉
法ニ定メタル特例ハ此ノ限ニアラス

(伊)第五十三條ニ曰ク各院ノ議員過半数列席セサルキハ集會及ヒ
會議ハ其効力ヲ有セス

同第五十四條各院ハ過半数ヲ以テ可否ヲ決定ス

(白)第六十二條二項ニ曰ク各院ハ少クトモ其議員ノ三分ノ二出頭
セサルトキハ評議スルヲ得ス而シテ已ニ評議シタルトキハ少ク
トモ投票三分ノ二以上ノ同意アルニ非サレハ決ヲ擧クルヲ得ス
(澳)第十五條ニ曰ク凡ソ帝國議會ノ裁決ヲ確乎不易ノ者ト爲スニ
ハ下院代議士百名上院議員四十名出席シ又兩院ニ於テ各公評人
ノ過半数ヲ得ルヲ必要トス凡ソ帝國議會ノ代表スル王國及部局

人民ノ權利大審院ノ構成司法權大政權並ニ行政權ノ職掌ニ關ス
ル審法ノ改正ヲ眞確不易ト爲スニハ少クトモ公評ノ多數全議員
三分ノ二以上ニ至ルヲ必要トス

第七十四條 皇室典範ノ改正ハ帝國議會ノ議ヲ經ルヲ
要セス

皇室典範ヲ以テ此ノ憲法ノ條規ヲ變更スルコトヲ得
ス

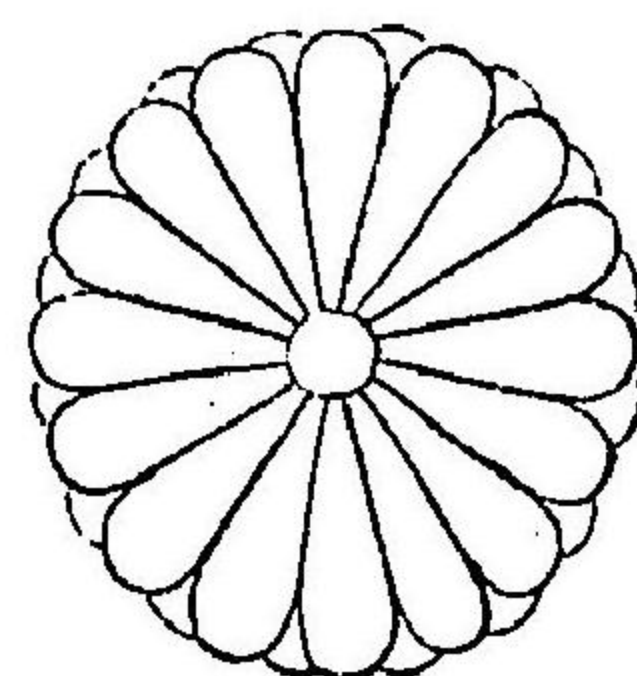
第七十五條 憲法及皇室典範ハ攝政ヲ置クノ間之ヲ變
更スルコトヲ得ス

第七十六條 法律規則命令又ハ何等ノ名稱ヲ用井タル
ニ拘ハラヌ此ノ憲法ニ矛盾セサル現行ノ法令ハ總テ
遵由ノ効力ヲ有ス

歲出上政府ノ義務ニ係ル現在ノ契約又ハ命令ハ總テ
第六十七條ノ例ニ由ル

各國
對照
大日本帝國憲法終

版權登錄



THE
CONSTITUTION OF JAPAN.

THE CONSTITUTION OF THE EMPIRE

OF

JAPAN

(OFFICIAL TRANSLATION)

1889.

THE HAKUBUNSHA.

Extracted from the "JAPAN HERALD."

THE CONSTITUTION OF JAPAN.

THE CONSTITUTION OF THE EMPIRE OF JAPAN.

(OFFICIAL TRANSLATION.)

Having, by virtue of the glories of Our Ancestors, ascended the throne of a lineal succession unbroken for ages eternal; desiring to promote the welfare of, and to give development to the moral and intellectual faculties of Our beloved subjects, the very same that have been favoured with the benevolent care and affectionate vigilance of Our Ancestors; and hoping to maintain the prosperity of the State, in concert with Our people and with their support, We hereby promulgate, in pursuance of Our Imperial Rescript of the 12th day of the 10th month of the 14th year of Meiji, a fundamental law of State, to exhibit the principles by which We are to be guided in Our conduct, and to point out to what Our descendants and Our subjects and their descendants are forever to conform.

The rights of sovereignty of the State, We have inherited from Our Ancestors, and We shall bequeath them to Our descendants. Neither We nor they shall in future fail to wield them, in accordance with the provision of the Constitution hereby granted.

We now declare to respect and protect the security of the rights and of the property of Our people, and to secure to them the complete enjoyment of the same, within the extent of the provisions of the present Constitution and of the law.

The Imperial Diet shall first be convoked for the 23rd year of Meiji, and the time of its opening shall be the date when the present Constitution comes into force.

When in the future it may become necessary to amend any of the provisions of the present Constitution, We or Our successors shall assume the initiative right, and submit a project for the same to the Imperial Diet. The Imperial Diet shall pass its vote upon it, according to the conditions imposed by the present Constitution, and in no otherwise shall Our descendants or Our subjects be permitted to attempt any alteration thereof.

Our Ministers of State, on Our behalf, shall be held responsible for the carrying out of the present Constitution, and Our present and future subjects shall forever assume the duty of allegiance to the present Constitution.

[His Imperial Majesty's Sign-Manual.]

[Privy Seal.]

The 11th day of the 2nd month of the 22nd year of Meiji.

(Countersigned) Count KURODA KIYOTAKA,
Minister President of State.

(Countersigned)

Count ITÔ HIROBUMI,
President of the Privy
Council.

Count ÔKUMA SHIGENOBU,
Minister of State for Foreign
Affairs.

Count SAIGÔ TSUDUMICHI,
Minister of State for the
Navy.

Count INOUYE KAORU,
Minister of State for Agricul-
ture and Commerce.

Count YAMADA ARIYOSHI,
Minister of State for Justice.

Count MATSUKATA MASAYOSHI,
Minister of State for Finance,
and Minister of State for
Home Affairs.

Count OYAMA IWAO,
Minister of State for War.

Viscount MORI ARINORI,
Minister of State for Edu-
cation.

Viscount ENOMOTO TAKEAKI,
Minister of State for Com-
munication.

THE CONSTITUTION OF THE EMPIRE OF JAPAN.

CHAPTER I.

THE EMPEROR.

ARTICLE I.

The Empire of Japan shall be reigned over and governed by a line of Emperors unbroken for ages eternal.

ARTICLE II.

The Imperial Throne shall be succeeded to by Imperial male descendants, according to the provisions of the Imperial House Law.

ARTICLE III.

The Emperor is sacred and inviolable.

ARTICLE IV.

The Emperor is the head of the Empire, combining in Himself the rights of sovereignty, and exercises them, according to the provisions of the present Constitution.

ARTICLE V.

The Emperor exercises the legislative power with the consent of the Imperial Diet.

ARTICLE VI.

The Emperor gives sanction to laws, and orders them to be promulgated and executed.

ARTICLE VII.

The Emperor convokes the Imperial Diet, opens, closes, and prorogues it, and dissolves the House of Representatives.

ARTICLE VIII.

The Emperor, in consequence of an urgent necessity to maintain public safety or to avert public calamities, issues, when the Imperial Diet is not sitting, Imperial Ordinances in the place of law.

Such Imperial Ordinances are to be laid before the Imperial Diet at its next session, and when the Diet does not approve the said Ordinances, the Government shall declare them to be invalid for the future.

ARTICLE IX.

The Emperor issues or causes to be issued, the Ordinances necessary for the carrying out of the laws, or for the maintenance of the public peace and order, and for the promotion of the welfare of the subjects. But no Ordinance shall in any way alter any of the existing laws.

ARTICLE X.

The Emperor determines the organization of the different branches of the administration, and the salaries of all civil and military officers, and appoints and dismisses the same. Exceptions especially provided for in the present Constitution or in other laws, shall be in accordance with the respective provisions (bearing thereon).

ARTICLE XI.

The Emperor has the supreme command of the Army and Navy.

ARTICLE XII.

The Emperor determines the organization and peace standing of the army and Navy.

ARTICLE XIII.

The Emperor declares war, makes peace, and concludes treaties.

ARTICLE XIV.

The Emperor proclaims the law of siege.
The conditions and effects of the law of siege shall be determined by law.

ARTICLE XV.

The Emperor confers titles of nobility, rank, orders and other marks of honor.

ARTICLE XVI.

The Emperor orders amnesty, pardon, commutation of punishments, and rehabilitation.

ARTICLE XVII.

A Regency shall be instituted in conformity with the provisions of the Imperial House Law.

The Regent shall exercise the powers appertaining to the Emperor in His name.

CHAPTER II.

RIGHTS AND DUTIES OF SUBJECTS.

ARTICLE XVIII.

The conditions necessary for being a Japanese subject shall be determined by law.

ARTICLE XIX.

Japanese subjects may, according to qualifications determined in laws or ordinances, be appointed to civil or military offices equally, and may fill any other public offices.

ARTICLE XX.

Japanese subjects are amenable to service in the Army or Navy, according to the provisions of law.

ARTICLE XXI.

Japanese subjects are amenable to the duty of paying taxes, according to the provisions of law.

ARTICLE XXII.

Japanese subjects shall have the liberty of abode and of changing the same within the limits of law.

ARTICLE XXIII.

No Japanese subject shall be arrested, detained, tried or punished, unless according to law.

ARTICLE XXIV.

No Japanese subject shall be deprived of his right of being tried by the judges determined by law.

ARTICLE XXV.

Except in the cases provided for in the law, the house of no Japanese subject shall be entered or searched without his consent.

ARTICLE XXVI.

Except in the cases mentioned in the law, the secrecy of the letters of every Japanese subject shall remain inviolate.

ARTICLE XXVII.

The right of property of every Japanese subject shall remain inviolate.

Measures necessary to be taken for the public benefit shall be provided for by law.

ARTICLE XXVIII.

Japanese subjects shall, within limits not prejudicial to peace and order, and not antagonistic to their duties as subjects, enjoy freedom of religious belief.

ARTICLE XXIX.

Japanese subjects shall, within the limits of the law, enjoy the liberty of speech, writing, publication, public meetings and associations.

ARTICLE XXX.

Japanese subjects may present petitions by observing the proper forms of respect, and by complying with the rules specially provided for the same.

ARTICLE XXXI.

The provisions contained in the present Chapter shall not affect the exercise of the powers appertaining to the Emperor, in times of war or in cases of a national emergency.

ARTICLE XXXII.

Each and every one of the provisions contained in the preceding Articles of the present Chapter, that are not in conflict with the laws or the rules and discipline of the Army and Navy, shall apply to the officers and men of the Army and of the Navy.

CHAPTER III.

THE IMPERIAL DIET.

ARTICLE XXXIII.

The Imperial Diet shall consist of two Houses, a House of Peers and a House of Representatives.

ARTICLE XXXIV.

The House of Peers shall, in accordance with the Ordinance concerning the House of Peers, be composed of the members of the Imperial Family, of the orders of nobility, and of those persons, who have been nominated thereto by the Emperor.

ARTICLE XXXV.

The House of Representatives shall be composed of Members elected by the people, according to the provisions of the Law of Election.

ARTICLE XXXVI.

No one can at one and the same time be a Member of both Houses.

ARTICLE XXXVII.

Every law requires the consent of the Imperial Diet.

ARTICLE XXXVIII.

Both Houses shall vote upon projects of law submitted to it by the Government, and may respectively initiate projects of law.

ARTICLE XXXIX.

A Bill, which has been rejected by either the one or the other of the two Houses, shall not be again brought in during the same session.

ARTICLE XL.

Both Houses can make representations to the Government, as to laws or upon any other subject. When, however, such representations are not accepted, they cannot be made a second time during the same session.

ARTICLE XLI.

The Imperial Diet shall be convoked every year.

ARTICLE XLII.

A session of the Imperial Diet shall last during three months. In case of necessity, the duration of a session may be prolonged by Imperial Order.

ARTICLE XLIII.

When urgent necessity arises, an extraordinary session may be convoked, in addition to the ordinary one.

The Duration of an extraordinary session shall be determined by Imperial Order.

ARTICLE XLIV.

The opening, closing, prolongation of session and prorogation of the Imperial Diet, shall be effected simultaneously for both Houses.

In case the House of Representatives has been ordered to dissolve, the House of Peers shall at the same time be prorogued.

ARTICLE XLV.

When the House of representatives has been ordered to dissolve, Members shall be caused by Imperial Order to be newly elected, and the new House shall be convoked within five months from the day of dissolution.

ARTICLE XLVI.

No debate can be opened and no vote can be taken in either House of the Imperial Diet, unless not less than one-third of the whole number of the Members thereof is present.

ARTICLE XLVII.

Votes shall be taken in both Houses by absolute majority. In the case of a tie vote, the President shall have the casting vote.

ARTICLE XLVIII.

The deliberations of both Houses shall be held in public. The deliberations may, however, upon demand of the Government or by resolution of the House, be held in secret sitting.

ARTICLE XLIX.

Both Houses of the Imperial Diet may respectively present addresses to the Emperor.

ARTICLE L.

Both Houses may receive petitions presented by subjects.

ARTICLE LI.

Both Houses may enact, besides what is provided for in the present Constitution and in the Law of the Houses, rules necessary for the management of their internal affairs.

ARTICLE LII.

No Member of either House shall be held responsible outside their respective Houses, for any opinion uttered or for any vote given in the House. When, however, a Member himself has given publicity to his opinions by public speech, by documents in print or in writing, or by any other similar means, he shall, in the matter, be amenable to the general law.

ARTICLE LIII.

The Members of both Houses shall, during the session, be free from arrest, unless with the consent of the House, except in cases of flagrant delicts, or of offences connected with a state of internal commotion or with a foreign trouble.

ARTICLE LIV.

The Ministers of State and the Delegates of the Government may, at any time, take seats and speak in either House.

CHAPTER IV.

THE MINISTERS OF STATE AND THE PRIVY COUNCIL.

ARTICLE LV.

The respective Minister of State shall give their advice to the Emperor, and be responsible for it.

All Laws, Imperial Ordinances and Imperial Rescripts of whatever kind, that relate to the affairs of the State, require the counter-signature of a Minister of State.

ARTICLE LVI.

The Privy Council shall, in accordance with the provisions for the organization of the Privy Council, deliberate upon important matters of State, when they have been consulted by the Emperor.

CHAPTER V.

THE JUDICATURE.

ARTICLE LVII.

The Judicature shall be exercised by the Courts of Law according to law, in the name of the Emperor.

The organization of the Courts of Law shall be determined by law.

ARTICLE LVIII.

The judges shall be appointed from among those who possess proper qualifications according to law.

No judge shall be deprived of his position, unless by way of criminal sentence or disciplinary punishment.

Rules for disciplinary punishment shall be determined by law.

ARTICLE LXIX.

Trials and judgements of a Court shall be conducted publicly. When, however, there exists any fear that such publicity may be prejudicial to peace and order, or to the maintenance of public morality, the public trial may be suspended by provision of law or by the decision of the Court of Law.

ARTICLE LX.

All matters that fall within the competency of a special Court, shall be specially provided for by law.

ARTICLE LXI.

No suit at law, which relates to rights alleged to have been infringed by the illegal measures of the executive authorities, and which shall come within the competency of the Court of Administrative Litigation specially established by law, shall be taken cognizance of by a Court of Law.

CHAPTER VI.

FINANCE.

ARTICLE LXII.

The imposition of a new tax or the modification of the rates (of an existing one) shall be determined by law.

However, all such administrative fees or other revenue having the nature of compensation shall not fall within the category of the above clause.

The raising of national loans and the contracting of other liabilities to the charge of the National Treasury, except those that are provided in the Budget, shall require the consent of the Imperial Diet.

ARTICLE LXIII.

The taxes levied at present shall, in so far as they are not remodelled by new law, be collected according to the old system.

ARTICLE LXIV.

The expenditure and revenue of the State require the consent of the Imperial Diet by means of an annual Budget.

Any and all expenditures overpassing the appropriations set forth in the Titles and Paragraphs of the Budget, or that are not provided for in the Budget, shall subsequently require the approbation of the Imperial Diet.

ARTICLE LXV.

The Budget shall be first laid before the House of Representatives.

ARTICLE LXVI.

The expenditures of the Imperial House shall be defrayed every year out of the National Treasury, according to the present fixed amount for the same, and shall not require the consent there-to of the Imperial Diet, except in case an increase thereof is found necessary.

ARTICLE LXVII.

Those already fixed expenditures based by the Constitution upon the powers appertaining to the Emperor, and such expenditures as may have arisen by the effect of law, or that appertain to the legal obligations of the Government, shall be neither rejected nor reduced by the Imperial Diet, without the concurrence of the Government.

ARTICLE LXVIII.

In order to meet special requirements, the Government may ask the consent of the Imperial Diet to a certain amount as a Continuing Expenditure Fund, for a previously fixed number of years.

ARTICLE LXIX.

In order to supply deficiencies, which are unavoidable, in the Budget, and to meet requirements unprovided for in the same, a Reserve Fund shall be provided in the Budget.

ARTICLE LXX.

When the Imperial Diet cannot be convoked, owing to the external or internal condition of the country, in case of urgent need for the maintenance of public safety, the Government may take all necessary financial measures by means of an Imperial Ordinance.

In the case mentioned in the preceding clause, the matter shall be submitted to the Imperial Diet, at its next session, and its approbation shall be obtained thereto.

ARTICLE LXXI.

When the Imperial Diet has not voted on the Budget, or when the Budget has not been brought into actual existence, the Government shall carry out the Budget of the preceding year.

ARTICLE LXXII.

The final account of the expenditure and revenue of the State shall be verified and confirmed by the Board of Audit, and it shall be submitted by the Government to the Imperial Diet, together with the report of verification of the said Board.

The organization and competency of the Board of Audit shall be determined by law separately.

CHAPTER VII.

SUPPLEMENTARY RULES.

ARTICLE LXXIII.

When it has become necessary in future to amend the provisions of the present Constitution, a project to that effect shall be submitted to the Imperial Diet, by Imperial Order.

In the above case, neither House can open the debate, unless not less than two-thirds of the whole number of Members are present, and no amendment can be passed, unless a majority of not less than two-thirds of the Members present is obtained.

ARTICLE LXXIV.

No modification of the Imperial House Law shall be required to be submitted to the deliberation of the Imperial Diet.

No provision of the present Constitution can be modified by the Imperial House law.

ARTICLE LXXV.

No modification can be introduced into the Constitution, or into the Imperial House Law, during the time of a Regency.

ARTICLE LXXVI.

Existing legal enactments, such as laws, regulations, ordinances, or by whatever names they may be called, shall, so far as they do not conflict with the present Constitution, continue in force.

All existing contracts or orders, that entail obligations upon the Government, and that are connected with expenditure, shall come within the scope of Art. LXVII.

明治二十二年四月八日印刷并出版

定價金貳拾錢

著作者

長野縣平民

鹽

入

太

輔

神田區今川小路
三丁目九番地

著作者

山口縣土族

粟

屋

龍

藏

京橋區南佐
木町二番地柄

印刷者兼
發行

兵庫縣土族

長

尾

景

彌

芝區三田登
三拾六番地寄
目

東京銀座四丁目

大阪備後町四丁目

千葉縣千葉町

埼玉縣浦和驛

福岡縣博多中島町

佐賀縣佐賀

博聞社本

博聞社分

博聞社分

博聞社分

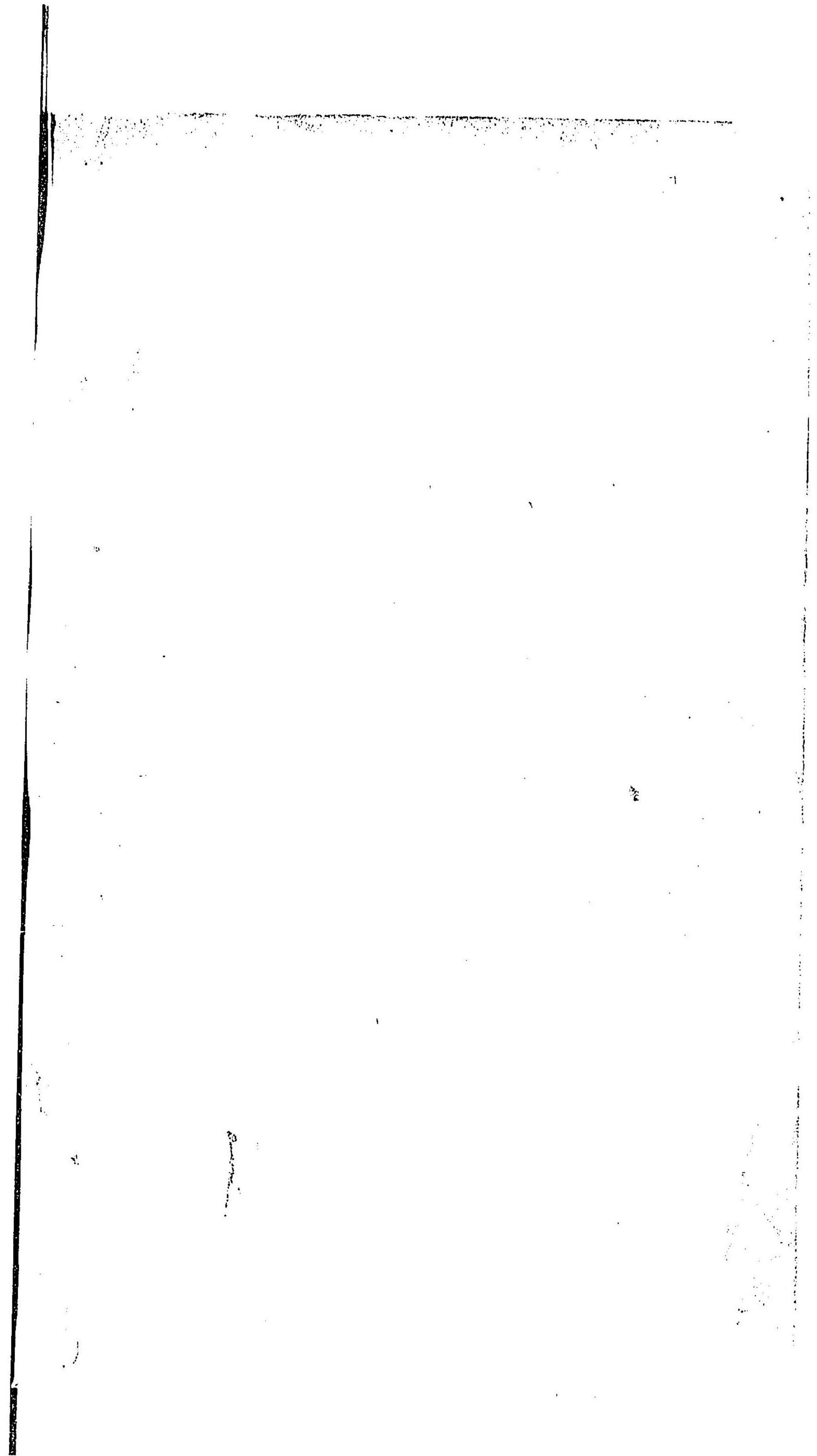
博聞社分

博聞社代理店

版權
所有

發行所

大 販			賣 所			大 販			賣 所																
尾州名古屋本町	駿州静岡江川町	信州長野町	福島縣福島	陸前仙臺大町	函館末廣町	越後長岡	加州金澤	伊豫松山湊町	備前岡山	藝州廣島大手通一丁目	肥後熊本	薩州鹿児島六日町通中町													
片野東四郎	廣瀨文林堂	西澤喜太郎	石川支店	木村文助	魁文社	目黒十郎	牧野一平	土肥與平	森禎藏	早速社	長崎次郎	吉田幸兵衛													
大 販			賣 所			大 販			賣 所																
東京日本橋通三丁目	東京南傳馬町	東京神田表神保町	東京神田錦町三丁目	東京神田錦町三丁目	東京神田裏神保町	東京神田小川町	東京神田三條上ル	西東京光通丸上ル	西東京河原町通	西東京寺通五條上ル	大阪本町四丁目	大阪心齋橋通二丁目	大阪長崎通四丁目	大阪新通四丁目	肥前長崎引地町	肥前新島古町通二番町	越後新島古町通二番町	濃州岐阜山北町	紀州和歌山北町	越前福井照手上町	備前岡山照手上町	雲州松江本町見下	因州鳥取火ノ見下	阿州徳島土手町	陸奥弘前土手町
善書	江屋半	西屋邦	須原鐵	時習社	明法堂	集成社	東村吉兵衛	大黒屋大郎右衛門	飯田信文堂	岡島眞七	松村眞兵衛	吉野常助	丸善書店	鶴野常助	井筒源助	三浦源助	津田源兵衛	岡崎源兵衛	細田喜兵衛	園山喜右衛門	前島榮次郎	阪井萬吉	野崎九兵衛	野崎九兵衛	野崎九兵衛



CZ
212
03



各國對照
大日本帝國憲法

鹽入太輔
栗屋龍藏 全著

東京博聞社印行

附英文憲法

031633-000-0

CZ-212-03

大日本帝國憲法 (各國對照)

鹽入 太輔

栗屋 龍藏 / 著

M22

BBE-0260

